の價の差あるかわからず。二尺四方のもの五百枚が一連なり。此會社の主たる製品は所謂ロール半紙、原料は木材、ツガ・マツなど。ボロは新聞紙以外にはあまり使はず。書院紙にもパルプを使ふ。此パルプは獨逸からの輸入品なり。最上品でも一割はこのパルプを入れ、粗なるものは半分も入れるといふ。其理由は競爭に在り。つまり他府縣より安いものを出さうとして此の如し。

縣内の原料は甚だ足らず。他府縣の移入多し。楮は東西諸國より來る。那須物と備後物を上品とす。三椏は土佐より取寄せるが、土佐で自ら使ふものよりは材料遙かに悪し、かの縣にては良きものを出さぬ考へらしいといふ。仲買はこちらの者、地元に出かけて取引す。此縣の紙産地は、地少なく人多くして耕地を得がたし。非製紙地にては此物の栽培に冷淡なり。勞力多くして材料乏しき爲、材料費を節約して勞力を以て之に代へんとする傾きあり。たとへば蛇目傘は粗薄の紙に墨を塗り糊を附け、一見丈夫に見する故に、色漉きの紙を用ゐて勞力を省かしめんとするも事行はれず。粗製濫造は、要するに競爭の激しい時代には、之を生産者に責むること能はず。

柳行李は本巢安八の二郡に生産者多し。蒻細工の外を樺の皮に包みたる小さい炭取など、形も色も最も古雅なり。郡上八幡の水野某出品す。彼地に行きたる時尋ねて見たし。この外に木彫玩具などのちよつと面白いものあれども、物産というてよいか否かは容易にきめ難し。

縣の藏書目錄を見る。この中には高山人の見せたる飛驒の書は殆と皆見えず。檀鴿三卷。是は飛驒村方奮記なり。近年の傳寫本なれども精確なり。檀はシラマユミ、即ち飛驒國の枕言葉なるべしと、神谷氏の題言に見ゆ。神谷は美濃志の著者、明治十一年の頃、縣廳に勤務せし學者なり。

塘叢二十卷、是は自筆本と見えて餘白多く殘れり。有りふれたる古書の抄錄なり。文政四年の自序に立塘といふ名見ゆ。第七卷の表紙に、潛藏國書といふ紙の札を貼りてあり。是亦神谷氏の家藏の記にや。荏野冊子、こゝには四卷あり。田中大秀著。

パルプの輸入

サンカのことを注意して行きたしと思ふ。普通山窩と書くも當らぬ當て字なり。年中山野に漂泊して、定まつた村をもたぬ者なり。警察本部の小西刑事、大垣署長の廣瀬君、共に此問題に詳しいといふ。サンカには通路あるらしいこと、又其中にも種類あること。毎年一回地を定めて彼等の大集會あることなど、此二君に聽けば教へらるべしと思ふこと多し。ノヤといふ部落あり。サンカと同じく川魚を捕るを專業とする賤民なれども移住すること無し。長良川の岸にも、又三條野の大池の畔にも住み、後者はやゝ大なる部落なりといふ。ノヤは野間かと思はる。池番として定住を許さるゝか。番太なども普通に漁業は上手なり。

岐阜市の盲人は今も正五九月の巳の日に集り、めくらの手引神なりとて辨天さまを祀る。祭式にはさしたる特徴無し。

割山と稱して、山野の使用權あり。之を隣村民にも賣ることが出來る舊慣、何とかして詳しきことを知りたしと願ふも、さういふ話をする人に逢はず。

七月八日、土よう

母の忌日なり。電車にて關の町へ行き、町を見てあるく。それから上有知へ、今は美濃町と謂ふ。同業組合の製紙試驗場に行き、又水力電氣の發電所を見る。この邊皇室の御漁場なり。長良川の水うつくし。

郡上の八幡へ人力車。備前屋に泊る。旅店にして料理屋を兼ぬるもの。夜郡長竹内氏、又御料の小川技手來り、色々の事を教へてくれらる。

けふの路の左右、藁屋の棟長くして中低なること支那の家の如し。瓦葺きにも此形少しあり。藁屋の破風を、別に藁にて塞げるものあり。吹雪の多い處なればにや。

郡上郡にての楮產地は、長良川と津保川の谷なりき。今も路傍に少々の痕跡を見るも、大體に於て桑に壓迫せられた姿あり。桑の木の皮は製紙用にはならぬかどうか。其試驗もして居ると同行の江崎技師言ふ。

この郡、山林は舊藩時代より甚だ振はず。農作にも使はねばならぬ爲なるべし。養蠶は

今中々盛なり。生糸の年産七十萬圓に及ぶといふ。手引がまだ行はるゝものと見ゆ。

稗はすべて畑稗、この地方では朝鮮稗といふ。加賀などで鴨足と呼ぶものと同種なり、味はよからず。成熟期も不同、白山の北側にはこの物多し。

サンカは又オゲとも呼ばる。郡上邊には夏のみ來り、冬は溫き方に行くかと思はる。伊勢では冬は熊野の方へまはると言はれ、此者の通路は定まつて居るやうなり。さゝらや籠、又箒などを作つて賣りに來る。岐阜では石龜を袋に入れて賣りあるく者あり。海津邊にて、多度の祭の日喧嘩をした爲に訊問せしことあるオゲ、後に岐阜にて贓物故賣にて所刑せられしことありと竹内氏言ふ。又石川縣にてオゲの貞女あり。夫の死したるとき村民憐みてよく之をいたはる。其折に見たるに、其小屋には小さき厨子様の物ありて、其中に先祖の位牌を納めて居たり。平人とさして異なる生活には非ざるか。はた此オゲのみが、特に彼等の中に入込んで居たものか。

木地屋の生活も、まだ此地方でならば尋ね得べし。武儀郡下牧村大字片知は三百戸ほど、多くは苗字小椋（をぐら）なり。木地屋の土着と見ゆ。郡上郡西川村の内ケ谷にも小椋氏あり き。是は他處より移住せし木地屋にて今は死に絶えたり。岐阜市にも同じ苗字の家あり。江崎君曰く、木地屋の中には容貌の立派なる男女多しと。この事又斐太後風土記の記事にも見ゆ。木下氏又いふ。前に三重縣飯南郡の警察署に在りしとき、管内のたしか森村大字猿山にて、崖崩れて川の中に、蓆包みの死體現はれしことあり。双物がその亡骸と共に包みてありしより、乃ち木地屋なることを知れり。木地屋の双物は双の付け方普通のものとは逆にて、左から磨ぎ手前へ引いて削るやうになつて居ることを知る者ありて、一見して是は木地屋だと言へり。彼等には木棺を用ゐざる葬法有りと見えたり云々。

飛驒にはテテと稱する特殊民あり。古河町の是重に三四戸、小鷹利村上野（かみの）に二戸、其他にもなほ多かるべし。上野の二戸のうち、一戸は醫なり。つまらぬ醫者なれど、藥がよくきくと評判せらる。是重のうち一戸は金持なり。平人窃かにその金を借る者あり。娘に千圓附けて遣りたしといへど、テテなるが故にもらひ手無し。何故にかゝる差別觀あるや知

ること能はず。犬を先祖とすといふが如き荒唐の説あれども、何人も是を實なりとはせず。ただ以前は履物を許されざりき。

所謂ゴンボダネはテチとは關係が無いやう也。ゴンボ種の方は部落に非ず。部落に混入せる少數の家筋なり。もと上寶村より出づといへど、今は各處に散在す。人に憑くと稱せらる。どうしてそれが知れるかといふに、必ずその憑かれた病人の口からにて、病人は其家の事をよく知りて語り、又之を驅逐すると、足立たぬ病人が此時のみは走りて、其家に行きて倒れる也。よく〳〵弱りたる病人ならば、憑いた本人を呼んで來て撫で摩らしむ。本人は勿論迷惑して之を拒めども、何としても病家の者が承知せずといふ。

是も竹内氏の話。伊勢と大和の境の高見山の頂上に社あり。東麓には入鹿の墓なりといふ大なる塚あり。この山の南を通る峠の中腹に茶屋あり。人之をオニギと謂ふも、其實は御祠宜にて、此塚と社の社掌なりといふ。本家は大和の方の麓村杉谷に在りとて、オニギの家には文書無し。毎年八月十五日を入鹿の日なりとし、夜分この山に參る者多し。

郡上郡某寺の寶物に鬼の髑髏あり、角と牙とはこしらへ物らしけれど、とにかくに奇なりとは、鬼の頭骨は後頭部が著しく長く突出せり。

七月九日、日よう

二宮江崎の二君郡書記を加へて一行四人、長良川の左岸を白鳥に向ふ、よき路なり。白鳥駐在の青木巡査部長も來り加はる。途中大島にて縣種畜場を見學す。この邊高原廣く連れり。

白鳥に早く著き、井增屋に宿をきめてから町の内外を見てあるく。役場より村圖を借りて見る。白鳥は上之保村に屬す。油坂峠の口なれば町つくりてあり。よく火事のある宿なりといふ。越前穴馬より峠を越えて、賣買ひに出て來る市なれば、山中の市場の特色をよく具へて居る。現在は福井縣内の交通改良せられ、穴馬よりはあまり出て來なくなれり。福井の方も縣道なれども、面谷と油坂の頂上との間だけは少しも補修せず、極めて悪しき路なりといふ。面谷から大野へは九里、此間は中々良い道なり。

けふの途中での見聞一二三。八幡の馬市は土用に立つ。當才の毛附なり。此邊古くからの産馬地と見えて、例の磨墨（するすみ）の傳説爰にもあり。牛道村大字那留（なる）、ナルガ野といふは山中の平野なり。石鈴と稱して振れば鳴る音する石あり。是をナル石といふは偶合なるべし。ナルは中國四國の廣い地域にかけて、斯ういふ山間の平地を意味する普通名詞なり。奈良も同じ。この那留ケ野の奥には、又ソロバン石といふを産す。是は玉髄といふものなりと謂へり。

郡上郡は人口六萬、三萬五千石の米を産す。稗は一萬石といふ。茶の實こぼれて多く野生す。茶には肥料を施すことなし。屋根の萱葺き用の爲に萱の種を播くことあり。斯様に土地の利用法は進みてあれど、植樹の知識のみは、この山間の勞働者はまだ持つて居らずといふ。

上之保村では山梨の皮を剝ぎて販ぐ者あり。又小梨の木も皮を採る。販路は江州の方なりといふ。梨子地の材料とすといふ説あれど信じ難し。

ホヤ卽ち寄生木（やどりき）にて兎を捕る獵法ありといへり。詳しく尋ねず。又山に住む犬もあることを聽く。

飛驒との交通も多く、その風俗やゝ入つて來て居る。飛驒系統の股引（もゝひき）は、カルサンの小さくなり又衣の下になりしものなること、實物によつてよくわかる。

夜分小學校長も話に來てくれて、色々の事を聽く。月明かに四方の山は低し。

石徹白（いしとしろ）は爰でもイトシロといふ風に發音せり。その石徹白の冬の出稼ぎは郡上あたりへも來る。以前は若い者が家に殘り、年より子供のみが出て來るので、自然物もらひの形になりしことは、牛首も五箇山も同じきが如し。どうしてさうなつたかは誠に考へて見るべき現象なり。飛驒も古くから石徹白と關係深し。大野郡よりこの越前の山村に入るに、一旦白鳥まで出て來て、檜峠を越ゆる者今でも多し。是は白山の主要登路の一つにて、卽ち又明日我々の向はんとする道なり。

江崎君云ふ。岐阜では今泉字本郷といふ邊に、常にサンカの群居する處あり。警官之を

追拂ふといへども、久しからずして又歸つて來るといふ。この話一昨夜岐阜にても聽けり。對岸某處の藪の中といふ話なりき。それがこの今泉本郷のことなりや否。ともかくも彼等の定住性は全く無きに非ず。たゞ普通の村組織法に服せずといふ迄では無いか。

二宮君は云ふ。このサンカとよく似たる者、磐城相馬地方にてはテンバ、又はテンボと謂ふ。妻子眷族ある漂泊者にして、主として箕なほしを業とす。山の中腹以上に七八つの横穴あり。二十年前にテンバといふ者、時に來つて是に住みたりしを記憶す云々。此名稱は仙臺附近にも知られ、亦さういふ毎年來る乞食のことなりしと聽く。それに家族がありや定職がありしか否かはまだ確かめず。名の起りは不明なれども、或は是が一つの手懸りかも知れず。關東の田舍にては、サンカといふ語も警察人などは使ふも、一般には箕直しを以て通用し、此中には漂泊ずる者と、既に一地に土着するものとあるが如し。

七月十日、月よう

長良川を渡り、長瀧寺の廢址の下を過ぎ、北濃村の役場に憩ふ。朝日寺夕日寺の話などを聽く。

爰にて始めて草鞋をはく。前谷にて長良川と別れ、阿彌陀ノ瀧を見に行く。石徹白駐在の巡査と出逢ひ案內してもらふ。

檜峠（ひのさたうげ）の頂上まで、村長と校長との二人迎へに出てくれて居たり。こゝに暫く休息して廣廣とした山の杉林を眺む。百年を越ゆる木多けれど皆自然生にて、其親木の大木は山の嶺に、幾らとも無く伐られてたゞ巨大なる伐株を殘せり。白山中居神社を拜し奉る。石徹白川はみたらしとして、御社の東と南とを繞り流る。

中の在所の上村五兵衞といふ醫家に泊めてもらふ。金屛風に火鉢、まるで冬のこしらへ也。

白鳥の町に近く、天狗塚山といふ峯聳えたり。頂上には河原石多し。天狗が運びしものといふ。一說にはテンゴ卽ち畚（もつこ）のことにて、人が持つて上りしかといふも是は一つの合理化なるべし。長瀧寺の址には假神殿を建つ。大なる社殿敷地中央に在り。假本堂もあはれ

なさま也。永享三年の鰐口は存し、堂の中に幽かに經を讀む聲す。此頃御料林の拂下を受けて、恢復の計を爲すといふも、何分にもひどい衰頽にて、或は永久に消えてしまふかも知れず。舊寺屋敷の跡、在家なるもなほ坊の名を呼び、僧は今二口あるのみ。

長瀧寺は泰澄初登山の途次に創立すと傳へ、天台の別院なり。もと三千坊ありと傳ふ。維新の際にはもう十坊に減じ、無住又は坊守を置く者もありき。そのうち二院は清僧にして、他は世襲僧なりき。一人の同行をも置かず、當時既に農を業とせりといふを見れば、決して排佛毀釋の爲のみには非ず。其坊の主、今多くは他處に行き、屋敷と田畠とを小作に付せり。

寺の舊領は北は飛驒の荘川に及び、南は上之條の中津屋までなりしといふも、近世は僅かに長瀧一村に限られき。郡上の青山侯へは、獨活などの方物を獻ずるに止れりといふ。門前といふ字と町屋といふ字とは接續す。町屋は近年の地變の爲か、山と流れと相迫りて宅地を置くべき平面無し。坊の割り方も近頃の地圖にては判明せず。

阿彌陀の瀧は水簾にて、其背後に大いなる岩窟あるさま、今昔の猿神物語を想起せしむ。山上より突出せる巖石を銚子の口と謂ふ。爰に瀧神の傳説あり。石徹白の鬼甚九郎といふ者、大石を以て其銚子の口を打碎き、今のやうに短くしたと傳へらる、瀧の神は伯耆の山へ行くとて飛び去りたりともいふが、なほ岩窟の中にはさま〴〵の石體を存し、地方の信仰を繋ぐかと思はれたり。

中居神社には、美女下神社等六つの社を合祀す。全村社人にして御師として近國を巡回したり。年貢免除の特典は失ひたれども、今も土地の負擔は少なく、一村を擧げて年々の祭に奉仕することは變らず。

上ノ在所の對岸に、少しの平地ありて長者屋敷といふ。近年石器の異形なるものを掘り出すといふも見ず。古喜美武比古の二人、この長者屋敷に住し、正月十五日に社を作りて、山宇都第三の御子を祭るといふ類の口碑を記憶する者あれども、文書すらなほ心もとなし。まして其一部の援用なれば、到底旅行の途次などに於て考究し得べき問題に非ずと思へり。

上村五兵衛氏の家に、陶器のビンダラヒといふを藏するを見たり。五寸に一寸五分ほどの細長い水盤にて、珍らしい形なり。是にサネカヅラなどの樹液を入れて、髪の毛のほつれを撫で上げしことも、さして古い世の事ではあるまじと思はるゝが、村に存するは是た だ一個なりといへり。

地形名には注意すべきもの多しと覺えたり。ハバは二つの平地の中間に在る急傾斜地、東國のママと相似たり。信州その他にてハベといふは是とやゝ異なり、寧ろ石徹白に於てダナといふもの、即ち急傾斜の上頭にある緩傾斜地をいふかと思はる。其ダナといふは恐らくは棚と同語なるべし。又アフギといふは扇かと思はる。谷が一時に廣くなつた處を、形によつて斯く名づけたものらしく、是も白馬山麓などに於て、アブキと呼ぶ地形を説明するに足らんか。

又一團の民居、及び田畑の一つの集合をカイツと謂へり。カイツは即ち垣内にて、本來は一人の地主、又は一家の家長が持つて居た名殘かと思はる。

この村は土地の賣買にも專ら四至の名を掲ぐること、中古の文書に見ゆる通りなり。是をシホウガラミと謂ひ、文字では四方境と書きたり。

蚋（ぶよ）をカといひ、之を防ぐ蚊遣の裝置をカビといふことは、日向の椎葉村など〳〵全く同じ。何かよく火を持つ燃料を、藁を以て錘絲（つむいと）の形に巻き、腰に下げて絶えず燻して居ることも彼と變りなし。只燃料が彼に在つては蕨（わらび）の根の、粉を取つたあとのほどろであり、爰では稗粟の殻などを用ゐるだけの差なり。

燒畑この村では六年作り、其後を荒らすこと三十年乃至四十年、中には五十年も過ぎたる杉の自然林さへもありといふ。

農民冬閑の餘業として木を挽くこと、山奥には珍らし。四分板方一坪を一間元（けんもと）と呼ぶ。材一尺〆の八分の一に少し足らずといふ。立木の價としては一間元十錢から二十錢、尺〆になほして八九十錢以上一圓七十錢まで也。木挽一人一日の切程四間ほど、其賃六十錢位なれば一間に付十五錢、こゝから前谷への運賃一間元に付現在七錢、一人で六間まで運ぶ

のが普通なり。炭の運賃は十貫目三十錢する丁場也。

この村の川、岩が荒くて木流しがきかず、一本流しでも木が痛む故に殆と行はず。たゞ六尺木のカナギ(雜木)位は少しづゝ出すのみ。此邊のカナギは楢でも他の木でも、皆沈まぬので流すことを得る也。

七月十一日、火よう

四時に起き五時に立つ。雲深き深山の夜明けを見たり。朝日の峯の頂ににほふさま美し。村長校長送りて來る。校長は小谷戸の分教場まで、村長は三面(さつら)の對岸下穴馬との境まで來て別れ去る。

小谷戸は九戸、三面は五戸。この間一里あり。分教場はこの十四戸の爲に設けらる。教員は一人なり。この二部落は萱葺多し。爰でもクヅヤと謂ふ。三面五戸のうち大久保村長の家のみ杉板葺なり。杉の木の段々得にくゝなる爲なりといふ。

タダコエといふ路の名、下穴馬の角野より同下大野へ越ゆるをもしか呼べり。別に本道あり。此方は冬分雪崩(なだれ)の危險を避くる爲に通ふ路にて、荷物が持てぬ故に只越なりと說明すれど、是は古語にて直路卽ち近路の意なるべし。

水に映じて岩ツツジの咲けるを見つゝ行く。

下穴馬村朝日の小學校に憩ふ。讀本の中の「海」といふものを說明するに、こゝの何とか淵を一萬も二萬も合せたほどの大きさと言ふのを聽いて、面白くおもふ。さう言つたところで山村の兒童にはなほ海を胸に描く能はざるべし。よき畫を與へたし。

此村の村長と同行して大字下山まで步む。下穴馬村にては板屋愈〻少なく、クヅ屋は急傾斜にて、棟より三尺ばかり下に栗の木の棒を通し、其端をぐし押への木と結ひ合せあり。此邊から腐ること多かるべしと思はる。

石徹白川の合流するより少し上の方に、川を隔てゝ相對する同名の部落、西を朝日前坂といひ東を角野(かくの)舞坂(まひさか)と謂へり。九頭龍の本流に入りてよりも、相對して朝日と角野(かくの)あり、朝日は北岸にて日受けなり。角野は銅山のある村にて陰村なり、仍て思ふに角野は多摩川

上流などでいふ日陰のことならん。朝日の方が勿論早く開くる村なり。

上下穴馬村は下流の數村と共に、美濃郡上の青山氏領にて、陣屋は勝山在の若江に在りき。此邊の稅は深山なれば甚だ低く、下田は舊一村なるが、諸色を結び入れて高十三石あまり、大野町の石代を以て金納することゝなり居れり。地租改正後も田の地價一反二十圓を超ゆるもの無く、畑も亦之に相應す。石徹白では地價十七圓とかゞ田の最上にて、最下には反三圓といふもあり。畑は通例は八圓位なりといふ。

下穴馬村長はこの下田の人にて爰に來て別れたり。道すがら珍らしき話を聽く。その二つ三つ。

大野郡の山間には、大家族の家少なからず。たとへば下穴馬村全體では、一戸平均七人餘なれども、大字下山には十五人ほどの家もあり。西谷村の熊ノ河、溫見なども有名なもので、四夫婦ぐらゐも同居し、弟の方が子を多く持てるもあり。何れも仲よく分家をしたいなどゝは言はず。

下穴馬村では、子女の出稼ぎを罷めさせる方針といふ。娘が惡い病を持還ること多き上に、此邊の女は騙されやすく、又男にはまりやすし。出ることは常に不利といふことを、村の人々も經驗して居る。

種苗も外から持込んで來る者は、杉でも楮でも何か此土地に相應せぬやうに思ふといふ話、是はまだ試驗が足らぬのかも知れず。しかし椎蕈の栽培などは、伊豆から傳習した知識では、うまく行かぬといふは尤も也。冬は大分寒い土地なれば。

此村昔からの帳面紙を今も製して居る。火事の危急に井戸の中へ投込んで立退き、暫くたつてから引上げても少しも損ぜずに居るといふ紙で、京大阪の商家の大福帳は、多く爰へ注文する。下山及び山大納の部落にて、冬中之を製す。他の大字にも始めた者はあるが永續せず。三椏の栽培も起りたれども、土地の者は楮を大事にし、路傍の畑にもまだ楮多し。大よそは村限りの原料に供して昔風な漉き方を守り、新種を作らうとする考へはまだ起らず。

住民の衣料、常用は皆麻布なりき。サックリ(裂織)といふのは爰では麻絲をたてとし、ヲグソ卽ち苧の屑を紡んだ太いものを緯にする。外の働きにはすべて是を着て居たのに、もう此頃は木綿を着て田に出る者が出來たと謂つて、老村長は歎息せり。しかし木綿を家で著る以上は、古くなればやはり仕事着にする他なかるべし。カルサンの材料なども、けふ途中で見たものは六分までが麻、あとの四分は木綿で、共に紺に染めてありき。

下山では夏着と稱したのが、麻布で作つた夜着のことなりし。今その風止むといふ。

下山は戸數十四、三垣内に分る。屋根葺きには三組合同して一つのユヒ組を爲し、毎年順まはりに三戸づゝ葺いて行くことにして居る。材料と勞力は共に全部が村内のものなり。二十年以上も持つ家もあれど、大抵は十五年もたつと葺替へを要する。葺き方の粗末なのと雪が深いのとの爲に、早くいたむかと思はる。棟を留めると稱して、栗の木の棒を屋根に通すことは、此邊でも皆して居る。屋根はこゝから腐り始めるやう也。屋根の古萱は林中に堆積し置きて肥料とす。近頃は是をも堆肥小屋の中に入れしめんとして吏員盡力すといふ。

萱葺吊として立てた茅山、村の近くにも處々に見ゆ。此村は村山を早く分割したりと見えて、個人有といふ山多く、四千五百尺の荒島山さへも、頂上まで私有なりと聽く。山を持たぬ住民もあり。僅かな山手錢を拂ひて、地を限つて他人の山の木草を刈る。

植林の前一年は、燒畑を作る方が結果よしといひ、栗を蒔いてあるのを見かける。五箇村大字打波などは、今も燒畑を主とす。氣の毒な山中の貧村で、小學校費まで縣からの補助を受けて居る。それでもカンコ踊といふ古風な踊はある村なり。

佛原と此村(下山?)と組んで九頭龍川をせき止めて魚を捕る。上流からの故障申出が多いので、此頃は中絶して居る云々。

暑さに堪へかねて暫らく下山の路傍の家に晝寢をして居ると、大野郡役所から松田君といふ人が來てくれ、この人に同行して荒島山の麓の路をつたひ、東勝原といふ處まで來れば、大野からの人力車が迎へに出て待つて居たり。夕方町に入り、俵屋といふ家に一泊。

是も料理屋兼業なれども庭廣く、松の間の月もよし。

大野の町のはづれ、たしか清水（しやうづ）といふ字のうち也。近頃は五六戸のサンカ定住す。最初たゞ一戸のみありしに、いつの間にか次第に集り住むなり。松田君云ふ。サンカは釣をなさず。竹籠に柄を附けたものにて、主として野川をあさる。川漁を兼業とする部落は、此近くにも古くからあり。其起原については聞くことなし。坂井郡の鐵道沿線にも一つのサンカ部落ありといへり。果してさうか。

七月十二日、水よう

朝早く起きて、町の西なる清瀧神社に參拜す。このあたり城址なるべし。

大野を發し福井に向ふ。平泉寺の故址を訪ふとて、田の中の路を行く。白山社の杉林に苔を踏みて歩み、義經記の昔をなつかしむ。勝山の町にては小學校見學。

九頭龍川の岸を下り行く。小舟戸といふ地に憩ふ。川上の遙かに眺めらるゝ岸なり。

松岡の町にては、藥師の隣に憩ひ、夕方になりて福井に入る。一昨年の名和屋に泊る。

田尻子爵岡局長などすでに來てあり。又多くの土地の人にも逢ふ。

七月十三日、木よう、極めて暑い日。

午前は産業組合中央會福井支會の大會、模範組合の表彰式に參列し、午後は一時間ばかりの講演をやらされたり。其あと寫眞展覽會を見に行く。村落の寫眞には興味を引かるゝもの多し。けふ人に聽きし話二三。

千福といふ村の産業組合は、二町八反ほどの田畠を所有し、之を組合員に貸す。生産組合ともいふべきものなれど、現行法はまだ之を認めず。將來之に由つて小作人の共助を完成せしむることを得んか。

三方郡耳村河原市の伊藤正作翁著書。農人嚢自寫、耕作早指南種稽歌、又農業家訓一冊、この最後のもののみ刊本あり。

足羽郡社村笏谷（しやくだに）は石の産地、石工多く住す。大迹皇子（おほあとのわうじ）を石工の祖神とする由緒を傳ふといへり。山の石像の作者も彼等の中に在るか。たゞ大膽と評すべき作品なり。

足羽郡の鴨の坂網猟は今もなほ行はる。田地に水を溜めて鴨を誘ふ。その人工の鴨溜のみを、此地方ではフケといふ。フケは沼田の意味に弘く行はるゝ言葉。

同じ郡東郷村、下昆沙門の福田の二大字は、何れも二三十戸の部落にて、三百年前の地圖には見えず。相互に通婚するのみにて、他の部落との緣組は今日もなほ稀なり。言語は卑野なれども純農にて、他の農家と異なる所を認めず。富める者もあり。然れども外から細工を生業とするのみにて皮革は取扱はず。吉田郡松岡村の一部に住するカハヤなども、たゞ籠は肋骨が一本足らずなど〳〵噂せらる。

三方郡耳村大字郷市の一部に住する者も皮をさはらず。藁細工をする者及び荷馬車曳き多し。米國に行きて財産を作りし家も少なからず。小濱中學校の優等生にて、今大學に進める者も此中に在り。

大飯郡青郷村西三松に住む者も、籠細工・藁細工などを生計とす。

今立郡の池田には、池田のジョウブロといふ者住す。狼のかしらと謂ふ。詳しいことは話者も知らず。毎年日を定めて福井の近在まで米の配當を集めに來る。田の盜人を防ぐの驗ありといふ。もとはカルサンをはいて來たものであつた。

七月十四日、金よう

午前は共進會を觀る。出品中に目留まりしもの林産部にては油桐樹皮。これは兵の靴などを染む料といふ。又桐實。カトン糸卷、一ダース五錢ぐらゐ、若狹の熊川村より出す。紙布の帶地、博多織の如し。吉田郡森田に產す。

午後福井出發。足羽川の岸邊づたひに、再び大野の町に入る。途中石徹白村の村長に行逢ふ。

足羽川の谷より大野の平原へ越ゆる峠の頂上には、石龕ありて大小數體の石地藏を置く。その中央のものは立像にて、幼兒を抱けるさま、正しく子安地藏なり。頂上の地は大野郡西羽生村大字計石なり、此東には坂戸といふ地もあれど、此路は新らしと見えて、頂上の石には中庄の飛地とあり。

狼のかしら

九頭龍川の谷には路傍に石地藏多し、多くは形小さく合掌の坐像なり。是等の石地藏は大抵は新らしいもの、しかも眞宗の信仰とは沒交渉と見ゆるが面白し。

五箇村にては石棒模擬形の石に、南無阿彌陀佛と彫りたるものを見たり。

大野にては前日の宿にとまる。夜郡長若杉喬氏に饗應せらる。薩摩琵琶を彈く者をよびて聽く。相當に下手なり。

七月十五日、土よう

中村郡書記を加へ同行四人、西ノ谷に入る。瀧川巡査案内す。以下談片、多くは途中あるきながら手帖に留める。

かくま石、杉皮葺きの屋の上に載せる扁平な石、此郡村岡村三谷より出す。之を使ふのは勝山附近に限る也。又この方面にて、下木の若枝を田に入れて綠肥とす。枝は後に薪とす。雨に洗はしむる爲に之を田の端に立てゝ居るのは一風景。

尾崎彌右衞門といふ人の事業、詳しく尋ねて見たしと思へり。又其家の不幸のこと。

大野の町の人の遊びに行く山中の湯屋の話。

花山といふ峠、淺山郡長の時代に開く。今立郡との境、かなたは境寺、此方は藥師。

上庄村下若生子を過ぐ。此村大字二十八、戸數千二百ほどあり。最も小さきものは五六戸といふ。地域廣く舊村々互ひに隔たり、併合して一大字となす能はざりしならん。

下若生子は三十戸、石灰山ありて年産五十萬貫、うち三十五萬は鑛山に送り、他は肥料に燒きて十萬貫となる。地方に散布す。上若生子は五十四戸、この上下の二部落は共に以前かな山のありし時代に、遠方より移住し來りし者といへり。路の傍には少しも田見えず。山の上に若干の田ありといふ。下若生子の田は、土地の年消費量の四分一を産する面積、上若生子の田積は更に其半に過ぎず。

然れども其不足の米は平野より買求め、山中ながらあまり雜穀を食はず。それといふのが冬季の生業として紙漉きがある爲にて、此邊にも少々の楮はあれども、多分は隣里より買ひ來りて之に加工す。所謂帳紙なり。

石灰山

又壯丁の一半は、今も鑛夫として出稼ぎし、毎年鄉里に送金し來る。其行先は、面谷そ
の他近鄉の山だけに限らず、足尾にも行き、弟や次三男の如きはめつたに
還つて來ず。

此等の收入ある外に、上下若生子には最大なる部落有林ありて山稼ぎ豐かなり。山入り
の權利は、他區人に讓ることを禁ずるも、炭を燒き薪を樵りて之を賣ることは自由なり。
面谷鑛山(三井?)にては、精鍊所の敷地は上若生子の區有なりしを買取り、其上に附近の
煙害地に對しても、年々の借料を支拂へり。此種の部落收入は、最初には區の協議費に充
て、餘りあれば區民に分配する也。

此區の如き財產の多き部落と、他の山林乏しき部落との間に、公有林の統一を行ふは頗る
困難の事業なり。仍て一旦村有と爲したる後、常用の部分には區の爲に地上權を設定し、
上の方の平生利用せざりし部分のみ、村が自ら經營することゝ爲せり。

保安林制度の効果は、既に現はれた所あり。たとへば上庄村大字木の本の如きは、從來

水少なき土地なりしに、四目木谷を保安林とした結果、水豐かに旱損の患無くなれり。即
ち淸瀧川は是なり（此川は赤根川に合して次に眞名川に合し、又直ちに九頭龍川に入る流
れ也）。之に依つて木ノ本は地元部落でありながら禁伐を歡迎し、他の部落の者の之を犯
す者を警戒して居るといふ。

上下若生子を通りて心付きしことは、小學校の割合に立派なることゝ、子供の無やみに
多きこと也。亭主の不在がちだといふに拘らず、或は其爲に却つて目に立つか。

家々疊といふものは一枚も無し。藁を大事にすることは非常なものにて、所望すると二
三木位を奥から出して來る。屋の棟を留める棒は、此邊では破風の穴から棟と併行に中へ
差込みあり。斯くすれば棒で押へた部分の早く腐ることなかるべきも、其代りに萱は飛び
やすかるべし。谷狹ければ風の當りが弱いか。

西谷村の下笹又といふ處まで來て憩ふ。此家の亭主は、今足尾鑛山に行き飯場頭をして
居る由。此村も上下若生子と同じく鑛夫出稼ぎ多く村に現金が入り、女子供のみ多い處、

殊に中島は消費者の居住地なれば、宿屋が立派なり、又錢湯などもあり。

西谷村は大きな谷二つに分れてY字形をなす。其落合の地が中島にて、中央では無けれどこゝに役場あり。爰より溫見（ぬくみ）までは五里、自分等の向はんとする上秋生までは三里あり。下流の上庄村と境へは一里。

中島の旅館の主人も、西谷の飯場頭をして居る。遠方に行つて居る者は久しい間還つて來ず。家は女子のみを殘し、たま〳〵留まつて居る青年などは、町の者のやうな服裝と顏つきをして居る。

ボツカ（歩荷）に出るのは皆村の者なれども、是が爲に毎日十圓の運賃が支出せらるといふ。買ふ物は高くなり賣る物は安くなるので大困り、村は今や車道の開通に熱中し、此道を郡道乙種といふに編入してもらつて、年一千圓を是に寄附して居る。但し現在はまだ上若生子の精錬所入口までしか車は上らず。且つ新道は眞名川に沿うて一里遠くなる故に、村の人はなほ舊道の笹又峠を越えて往復して居る。

此郡上味見（あぢみ）下味見の二村は杉を栽うること盛なり。殊に下味見は地の利を得て、池田川の水に筏を浮べ、一日にして福井へ運送し得。しかし斯かる例は寧ろ稀有、多くは夏季出水の期に乘じて木を流すまでなるに、灌漑の利害は之に對して優越し、縣令は四月半より十月迄の木流しを禁止せり。その殘りの期間は山中では積雪の時なれば、結局は川は木材輸送には利用し得ざるわけ也。

中島にて晝食をしたゝめたる後、段々と山路を深く上りて下秋生に達す。よく〳〵の山家なり。五兵衞といふ舊家に泊めてもらふ。夜區長等を訪ひ來りて、土地の話を聽かせてくれる。

西ノ谷村は大字十一あり。其うち二を除くの外は皆紙を作る。純然たる昔風の帳紙なり。大野町の商人の言に、三萬圓無ければ西ノ谷の紙を買占むる能はずと言ひしも、今は是より少し減じたるやう也。生産の大體を言はゞ、上笹又などは四十戸の部落にて、一戸平均四百貫の楮黒皮をこ製す。黒皮十貫目は精撰して五乃至六貫目の原料を得、これを一カマ

と謂ひ、一カマより三貫目餘の紙を製す。帳紙は四十八枚一帖のもの三十帖を以て一丸といふ。品により多少あれども、一丸の目方は一貫二三百匁より一貫五百目まで也。されば一戸五百貫の黒皮を潰すと言はゞ、紙百貫目餘を産することになる。一貫の相場、今年は二圓八十錢位といふ。黒皮の大野町からの運賃は、雪の時なれば十貫三十錢ばかり、紙の製品を送り出すのは一丸二錢から三錢かゝる。車道が通ずればこの費用半減すべしといへり。

此村の紙、三極などを入れて色を白くし改良させんとしたりしに、從來の消費者之を承認せず、仲買等大失敗を爲し、それに懲りて再び昔風の丈夫な紙を作るに至れり。

楮と桑とは結局は兩立せずとおぼし。養蠶大分盛になりて、楮皮の自給は愈〻不可能となる。コクソ(蠶糞)は此邊では大切な肥料、是と厩肥とにて僅かの畠を作る。金肥はまだ全く使はず。田の收穫は反五俵を上々とす。しかも賣買地價は一坪一圓四五十錢、一反四百五十圓にもなる。小作料の勘定にも、此邊では坪何合といふ。田は普通四合位、畠には一二合のものあり。

黄蓮(わうれん)はこの地方の最も古い産物といふ。嶽山の好き場所といふ場所には必ず之を栽ゑたり。種を播きて三年目の苗を栽ゑ、更に八年にして根を採る。一時二圓五六十錢なりしこともありしが、近年は只の五六十錢にまで下れりといふ(一貫目ならん。一斤ではあるまじ、聞正さゞりしは不覺なり)。近傍諸村にても追々に栽培を始め、供給過多となりしが原因かとおぼし。

熊ノ河(くまがう)・溫見方面の冬の手わざは蒲脛巾(かまはゞき)なりき。武生より福井邊にかけて今もよく賣れる。冬の間の脚絆の代用として、需要大なりし也。夏の稼ぎは山畑を主とす。炭は少しも焼かず。運賃引合はねば也。小學校用の炭などは、却りて下流中島の方から運び込むことあり。炭竈を築くだけの計算も立たぬ爲といふ。

本谷の方でも學校又は養蠶の爲に炭を焼き始めしは近年の事にて、昔から炭は鑛山で使ふもの位に思つて居りし也。

下流上庄村木ノ本のボッカの者、今も灰帽子峠を越えて美濃根尾谷に往復す。途中は秋生と大河内とに泊る。鹽魚や砥石などを此方から持行き、茶など〻換へて來る也。但し越前の方にも茶は産せざるに非ず。

溫見・熊ノ河の者は、出稼ぎすれども定職無し。もとは乞食に出でしこと牛首など〻同じかりしといふが事實なりや如何。

木谷の各部落では鑛夫に出て行く。中には妻子を連れて行くものあり、又他所より連れて還る者もあり。本戸の休み所の家なども此例、こ〻の女房は秋田の者のよし。近年は各部落とも女の出稼ぎ多し。毎年秋になると募集員が入つて來る。主として攝津紡績といふ工場、大阪の近くに在るものといふ。出稼ぎの男女、殊に女は短期間にて歸り來る。永久に故郷を去る者は無しといふ。紡績に行つた女には、呼吸器病になり還つて來て死ぬもの多しといふ。塵埃の爲ならんが、日頃あまり空氣のよい處に住み馴る〻爲に、殊に抵抗力が無いのかと思はる。あはれなる話なり。けふも幾人かの蒼く白い顏の、障子の中から外を眺むるに逢へり。

此村には寺二箇所あり。大野町の眞宗寺の門徒も多し。この方は春秋二度の戒壇廻りの外には僧はやつて來ず。たゞ道場の番人が諸事をまかなふのみ。寺は近くに在つても雪中には交通絶え、戒名をもらふだけにも一通りならぬ辛苦をするといふ話を聽く。

各區の樂しみは村の祭なるに、神社合祀は洵に悲しいこと也。二里三里と隔つれば參拜する者少なく、自然に小さな頃からの親しさは消えて行くべし、池見蹶躅といふツツジ、此頃もなほ咲いて居る。水に映るのが最も美しく、池見の名はそれより起るといふ。けふ新曆七月半なるに、小麥もまだ畠に立ちてあり。桃の實は大さまだ拇指のさきほどにて青し。しかし屋敷畠には色々の瓜が花盛り、蚊の聲は殊に夏めきたり。

七月十六日　日よう、雨しば〳〵、

早朝下秋生を發し、灰帽子の險を越えて美濃の根尾に向ふ。

昨夜の宿にて始めて稗の飯を食す。此家の爐邊の名稱、橫座の左側女房座のことをナベ

ザ、其に對する客座をヨコジロ、下座をスエジロ、文字にて横次郎末次郎と書けり。小さい瓢のヒサクをこしらへて貰つて持還る。

山中に畠あり、大豆を作りあり。兎の防ぎに五つの方法を併せ用ゐて居る。一・案山子、二・貂の形に擬したる赤い杉の葉、三・石を樹の枝につり下げて動くやうにしたもの、四・ヤキタテ即ち髪の毛か何かを焦がしたもの、日向椎葉のヤエジメも同じ。五・水を引いて來て鉦力の鑵を敲かしむ。

處々の休場に石地藏あり。人の亡せたる場所に地藏を立つること、東國の馬頭觀音の如し。地藏の石龕は扁石をたゝみて造り、形狀塚穴に似たり。灰帽子峠の頂上にも地藏あり。此峠武田耕雲齋一行の通過を以て名を知らる。口吟、

ふし谷の奥のほき路の雨の日に昔さへこそ袖沾らしけれ

あら山のそきの萱原刈りあけて稗まく子らも大君の民

根尾村大河原といふ部落は如法の山家なり、淺野某といふ舊家に入りて憩ふ。耕雲齋の泊つた頃の家は燒けて無し。爐の火棚を極めて太い繩で吊りたり。虹梁といふは大きな梁、大黒柱から背戸の方にかけて、よく見えるやうに張る。非常に太いものにて是が爲に人の手を多くかけるといふ。此家も又里津の柴萬彌といふ舊家も、共に中門口といふ突出でたる部分あり。

白川莊川では、爐に三十貫の重さある五德（鋏輪）を置くといふ話を爰にて聽く。

西ノ谷にても大河原にても、熊は今もまだ稀に捕られるが、野猪は全く捕れぬやうになれり。汽車が通じてからの變化で、伊勢の方から冬になると、山づたひに來りしものが、其爲に來られなくなつたのであらうとのこと。

クラミ三里といふ山路にて又雨に遭ふ。長島といふ處まで人力車が迎へに出てあり。根尾の樽見といふ部落の川に近い宿にとまる。村長物語に來る。北方町の警察署長もこゝまで來てくれる。

根尾谷一半は昔の大野郡、今揖斐郡となる。此方は本巢郡に屬す。大河原・能郷・大井水

武田耕雲齋

鳥等、比較的よい部落なり。能郷の白山は又一つの白山登路か。古風なる信仰傳はる。能郷は能藝に因みある地名といふ。終に行きて見ること能はず。

根尾谷の年貢は段木七百五十間なりき。他に數千間の段木を納めて、入用の物品に換へる習はしなりき。一間は一坪三十六才なりしが、根尾段木株式會社にては今は五六とし、別に七寸の横添を爲す故に、三十三才ほどゝなるといふ此勘定よくわからず。西谷の方の二會社では、六七又は丈間なりといふが是も不明。

七月十七日、月よう、

村の名木の櫻の老樹を見に行く。美鳥の陷沒地といふを見る。屋根まで沈みしといふ寺、再びもとの高さに立ちてあり。

引かへして根尾川の末を渡り、谷汲寺に詣づ。揖斐の町長及び署長に迎へられ、揖斐の町に行きて休息す。

池野の珍らしい町を過ぐ。二十年とか前までは原野の道の辻なりしが、追々に家増加して繁華の地となる。もと入會なりし爲に、家々の標札軒並に村を異にすること、越前吉崎よりも甚だし。卽ち家主の出た村に屬することになる也。

大垣の町へ夜に入りて著く。廣瀬署長を招きてサンカの話を夜更くるまで聽く。その要點次の如し。

サンカに四種あり。一をセブリと謂ふ。オゲ・ノアヒ・ポンなど是に屬す。さゝら・いかき(笊)を賣り、河川の漁をなすはオゲ・ノアヒなり。又ポンス・ポンスケともいふ。龜又　すつぽんを捕る故に此名あり。セブリの特色は神社佛閣、岩や橋の下に露宿する點に在り。

二をジリョウジと謂ふ。神佛の靈驗を說き、女などの弱點に乘じて信心を勸め、供へ物を欺き取る。窮すれば夜は破壞窃盜をなす。淨服や紋付羽織などを着る者あり。服裝に於て最も變化の甚だしきものなり。警官法官など看破すること能はず。大抵は無籍なり。

三はブリウチ、是も藥の効能を說くに御夢想などゝいふことを言ひ立て高く賣り付ける。

桐の箱の中に金襴などに包みて持ちあるく。右二種の者の特色は、町村に入りても旅店にはとまらず。善根宿を求めてとめてもらふことゝて、警官は宿帳にたよる故に、多くは此者の入込みたることを知らぬ也。

四をアガリと謂ふ。難船者とか困窮の人とかいつはりて財産家の恵與を乞ふ。木賃宿に泊り、國々の物持の名を通じあふ。彼等のみは自らサンカなることを承認すれども、他の三種は殺されても言はずといふ。連絡と祕密を守ることに付きては彼等にまさる者無し。戸を切る刃物に特色あり。其切口を嗅いで見るとわかる。即ち彼等のみは決して刃物にぴんつけ油を塗らぬ故に、嗅いで其臭無きは彼等の手口と知るゝ也。

明治二十六年中、三河西加茂郡の三國山に、何百人といふセブリの露營せるを發見せしことあり。一年一回冬に集まりて結婚式を擧ぐなりといふ。

碧海郡重原にても五六十人の露營せるを見たることあり。東京附近の山林に居るといふ者も此セブリなるべし。セブリのみにても全國十萬を下らざるべしと思はる云々。

プリウチの被害は、被害者馬鹿らしく恥かしければ多くは告訴せず。女二人にて來たる者、親鸞上人の話や越後の七不思議の話などをして、善根宿の人たちを感心させ、翌日親戀の御影といふものと筆草とを賣付けて行きし者ありき。

テントは綿にて刺したる大風呂敷の如きものなり。

セブリには美人多し。彼等の親方にて妾を三人もてる者ありき。彼等の仲間から出て三河の某地に定住せし者、つい身の上話を人にして殺されしことあり。

乞食名といふ處、三河の勘八山にも、又岐阜の金華山にもありき。露營の爲には飲用水の所在を考へ、土の上に火を焚くこと二三時間の後、火を消して其跡に臥せば嚴冬にても寒きこと無しといへり。

岐阜縣關の町にて、曾てセブリを狩り出し、各々國とところを聽きたゞして、それ〳〵其方向へ分けて送還せしことありしが、後二三ケ月を出でずして又合同して居るのを見たり。よほど巧妙且つ鞏固なる聯絡方法が彼等の中にはあるものと見えたり云々。

七月十八日、火よう

大垣の町に在り。安東俊道君の實父增田氏を訪ふ。又金森某氏の家に行き面會。

正午の汽車にて京都へ。

桑木嚴翼氏の家に行きて泊めてもらふ。夜新村出君を訪ふ。藤井紫影君に逢へり。

七月十九日、水よう

朝京都府廳に行き、知事その他の人々に面會、又小林區署に行き打合せ。

今村幸男君に逢ひ晝食を共にし、又その家に行きて子供の大きくなつたのを見る。

內藤湖南氏と河上肇君とを訪ふ。桑木家に歸つて見ると、新村君が來て待つて居たり。

七月二十日、木よう

北山行き。二宮君及び府の石井技手を仁和寺の門前に待合せて同行す。

梅ケ畑村を過ぐ。爰より三尾にかゝる也。葛野郡中川村の役場に立寄り、次で小野鄕村の役場に行きて晝食。長い時間村の人の話を聽く。話片二三。

此村の人たちは、月のうち二十日まで京に出る。荷物は途中まで手助けありて、二度分を持運ぶ。柴は三束、一束は六貫目ほど、二十貫目までは載く者少なからず、山の實費を引きて、一日五十錢ほどの稼ぎになる。鷹ケ峯の方へ運ぶものは一錢に三百目といふ。即ち十八貫にて六十錢、二回分一圓貳拾錢。但し薪の總賣値なり。

此村二百十五戸にて田は七十町歩、畑は僅かに一町歩、畑があれば皆杉林にしてしまふ。従つて野菜まで京から運ぶなり。養蠶は少しもせず。中川村周山町にても養蠶無し。中川には田畑四丁四反あるのみ。

村には專門の裁縫職人住す。村の婦人はこの手業をせず。

村有地といふもの二村には無し。山はすべて個人有。植樹は杉檜とも春の彼岸前後、時には四月にもかゝる。二月にはまだ山に雪ありて入ることかなはず。

杉檜林の下刈は七月、枝打は四五六月と九月から十一月まで。柚には他村の者も入つて働く。

車力の運賃は小野郷大森より梅ケ畑まで、一貫目の松炭が三錢位、丈夫な牛車なら二百貫匁は積む故、一日五六圓の收入にはなる。但し入費も少なからず。三日に一日は休み、米もよう食ふ故に、牛と合せて一日一圓は費える。薪も炭の木も山にて買ふのは一駄十錢位なり。一駄とは五貫目の束十束分、是には別に金を拂ふといふのはわからぬ話であつた。三束から二貫目俵一俵の炭を出す勘定にして居る。こゝに若干の餘裕があるものと思はる。

ネソといふは「ねりそ」、卽ち捻ぢて物を束ねる木、小野郷のネソは黒モジその他なり。

野口といふ部落は特殊なり。數十人常に山に入りて藤蔓を採る。山主も別に之を咎めず。筏用に賣るといへり。

歸りは杉阪を通る。頂上好風景、光悦寺に寄り、俗僧と其俗友に惱まさるゝ。杉阪村の道傍に藥師如來の堂あり。間口弘く横に長い堂、其軒に穴のあいた小石あまた、綿に貫き釘に引掛けてあり。野口村を過ぎて歸る。

夜瓢亭へ夕食に招かる。田島錦治戸田海市財部河上神戸の五君。

けふ途中口吟

白雲はいつれの山に歸りけんひとりさひしき岡の邊の松

七月二十一日、金よう

府廳抜手の案内にて二宮君と、八瀬大原の二村に行く。役場で色々の話を聽きしも、忙しくて手帖に取らざりしは殘念なり。八瀬では野猪の害の話、こゝも杉の植林盛んにて畠至つて少なきことなど。針金工場を見る。

大原では屑綿の工場を見學。小出石より出町まで、一駄四十貫の運賃は二十五錢。一車に五駄を積むがきまり。柴は一束一貫五百匁内外、仲買には之を二錢五厘にて賣る。割木は一束四貫、柴三束を以て之に充つ。價はクノギなら一束十六錢、雜木十二錢。牛車は大抵薪伐る者の自用、且つ其三割までは自分の山を伐る者なり。クノギは植栽す。苗は池田又は尾張より實を取寄せて播く。栽るのは四年木又は五年木。植栽後八年から十年まで

にて初度伐採、それからほゞ同じ期間を隔てて、八九回の伐採をくり返す。

是は昨日中川村にて聽きしこと也。杉丸太を床柱にするには、日うらの方を表に向ける。是を背といふと見えて、背割といふ言葉をつかふ。腹の方が木質惡しといふ。ダン木といふ語はこゝにもありて駄木といふ字を書き、又生駄（なまだ）といふ名もあり。美濃山村にては段木と書けども、もとは馬で陸上を輸送する薪といふ意味であつたかと思はる。

大原の寺々に參り、途中越（とちゅうごえ）をして近江に出づ、此道のどこかにて偶立の道祖石像を見たり。場處を忘る。或は八瀨か。

和邇（わに）へは行かずに堅田の浦へ下りて汽船に乘る。名物のひがひを注文して待つこと久しく、船がさきに來てしまふ。折に入れさせて案内の某君の家苞とす。

湖上の船は涼し。遙かに阪本三井を眺む。汽車には押川農商務次官同車、面會し得ずして京都に降りる。十時桑木氏に歸る。不在中南才三君訪來るといふ。

七月二十二日、土よう

けふは一日休息、午後內藤氏來られ、ともに再び瓢亭へ行き夕食、南君も加はる。かへりに小川琢治氏を訪ふ不在。

七月二十三日、日よう

朝立たうとする所へ小川氏來らる。十時頃の汽車にて奈良へ、奈良より櫻井へ、初瀨まで。では輕便鐵道、初瀨からは人力車、吉隱（よたばり）を過ぎて伊賀の名張まで。宇陀川は國堺を越えて流れて居る。名張の康樂園とかいふに一泊。庭內を水自在に流れ、凉み臺のやうな旅館なり。偶然に山林局の渡邊君と逢ひ話を聽く。

七月二十四日、月よう

一人になりて伊勢へ越ゆ。阿保を經て靑山峠。五萬分一圖にはまだ存する伊賀茶屋伊勢茶屋、二つともに今は無く、伊勢茶屋の跡には梅の老木あり。歩行の參宮者、此頃になりて再び多くなるといへり。是は勿論春さきの遊山を主とするものなるべし。

途中名賀郡伊勢地村の役場に憩ふ。境に塚を築く風習、名賀郡上津村にはありといふ話。

奈良より伊勢へ

共有地を分割して後にも、その私人の持地の上にまで、以前の入會權がなほ存する例、比奈和村にはありといふ話。籾殻を其まゝ田に入れる習はしあることなどを聽く。今一度來て見たしと思ひつゝ過ぎ去る。

一志郡倭村を經て久居に四時頃著く。輕便にて津市へ、聽潮館に投宿。長谷川久一君を訪ふ。夜に入り彼も亦訪ひ來る。

七月二十五日　火よう

七時に津を去り、栗真村の國兒學園に竹葉寅一郎氏を訪ひ、所謂特殊部落問題に就いての所見を聽く。非常な熱心にて、午後四時過ぎまで語りつゞける。

此間に大風雨になる。汽車に乘りたれども途中故障多く、靜岡に停車して夜明けに漸く動き、東京に歸り着きしは翌日の正午。

竹葉氏談片二三。手帖に書留めたるもの。

阿山郡中瀨村のうち寺田といふ處、服部川の岸に在る部落、自ら韓人の末なりといひ、一

もと八幡捜來記といふ卷物を藏す。昔より屠畜を業とせず。伊賀拾遺といふ書にも見ゆ。

志摩郡磯部村迫間に住する者四十三戸、印度より來住すと稱し、外國文學の記錄を藏したりき。竹葉氏は一覽せしも、其後燒棄てたりといふ。

八幡黒といふ染法あり。革足袋などを染むるもの、桑名郡深谷村下深谷部を本據とす。此村の醫家森某君は陸軍一等軍醫なり。この人自ら我家はこの八幡黒の本家なりといふ。但し由緒書は、是も既に紛失したりといへり。夙(シュク)の者は伊賀名張附近に住す。今は特殊部落の中には算へられず、多くは石屋を業とす。

ササラといふ部落は、度會郡田丸町佐田に十戸、同城田村上地に二十四戸あり。但しササラを製作することは無し。

飯南郡鈴止村は此縣最大の部落。農を營む。公稱五百戸にして事實は七百戸あり。表向きの戸數少なきは何故にや。大阪府泉北郡南王子村は是よりも更に大きく、全村二千戸以上もありといふは眞か。村長中野三憲といふ人は二十年職に在り改善に熱心なり。郡會議

員にもなつて居り、村は模範村なりといふ。

津市の周邊にも有力なる部落あり。竹葉氏は特にこの人々と交際親密なり。從つてその觀察する所精細を極め、參考に供するに足るも、自分には重ねて之を確かむる方法無きを憾みとす。一般に毛太く肌の色白く眼に光あり、美男美女多しと感ぜらる。冬もよく汗をかくは食物の爲ならんか。食事は三度々々熱きものを食ふ習慣あり。生の物を食ふこと至つて少なし。

又ザジズゼゾの發音が不得手にて、是がダヂヅデドになる傾きあり。伊勢萬歳といふものを好み、宴會にてはよく之を諷ふ。宴會にも膳は用ゐず、食器や盃を牀の上に置く。米麥を磨かずして炊く習ひあり。洗濯物を竿に通して乾すことなく、便器をよく使用する等、二三見馴れざる風俗を存す。末子相續の慣行あり、長男以下成長に從ひて次々と分家す。この他にも聽きたることあれども、それは筆錄することと能はず。この人の調査報告書別に大冊あり。精細を極め又同情に充ちたり。

旅行の話　その一

——大正五年・六年——

一

旅行が流行になつたのは、近世以後のことであらう。誰も彼も旅行する世の中になつて見ると、旅行者にも數十の種類及び階級のあることがよく分る。目的に依つてこれを分類すると、單に健康の爲に、なるべく平常の生活を變更せぬことに努めつゝ、安樂な旅行を續ける者が、最も低級な旅行者であらうと思ふ。

さりとて近世の俳人等の如く、寂しい思ひをする事を目的として旅行をするなどは、吾吾から見れば又餘り拘泥した旅行と言はなければならぬ。併し結局するところ、世の中が如何に進んでも、境遇が自由で心持ちの洒脫な西行一流の行脚僧ほど、羨むべき旅行者は

見出しにくからう。

吾々の如き境遇に居るものは、たとへ生活の半分を遊歴の爲に費しても、到底田舍を見た、田舍を知つて居るとは言ひ得なからうと思ふ。吾々が正眞の旅行をなし得ない障碍は幾らもあるが、殊に此頃つく〳〵と感ずるのは、一つは洋服を着て髭を生やして居ること、二つには日割を作つて旅程を急ぐことである。

職業又は生活の相違と云ふものは、まことに是非も無いもので、現に東京に三十年住んで居てさへ、自分等は本所の生活も知らねば、淺草も知らない。歴史ある日本の首都が、今に及んで尚一個の共同生活團となり得ない事情も、やはり其點にあるので、獨り本所の端々とは謂はず、同じ山の手の内でも、稀に町家の間に殘つて居る細い路次の奥などに住んで居る人々の心持は、尚久しい間吾々とは秦人越人の關係である。

自分は春になるとよく郊外の村々を歩くが市街を離れて初めて、こんな人も東京に住んで居るかと思ふやうな人に出遇ふ。例へば三月廿一日などに、老人老女の大師詣りにまじつて、鼠甲斐絹の脚胖に中齒の足駄などを穿いた若い娘たちがやつて來る。烏打ちを被つた十七八の色白の息子が、繼竿などを持つて千社札を貼つて廻る。どう考へて見ても、どういふ家の子女で、ふだんは何をして日を送つて居るのか自分の想像に浮ばぬ。

此外又例の暗黒世界と云ふものもあつて、要するに古い日本の思想では、この世界に現幽二個の社會が併存すると見た如く、一個の東京の市の中にも、三つ四つもの相互に沒交渉の社會が、併存して居ることを思はせる。

その社會のたつた一つで數十年間育成せられた人々が、偶々半月の閑を得てざつと田舍を歩いたとしても、單に珍らしい可笑しいと云ふことの外、心に解し合ふものは何も無くして歸つて來るのは寧ろ當然で、しかも其相手の側に於ては、吾々が近づかんとする場合にも、尚遠ざからんとする傾きがあるのである。

これは東京の人に話しても分るまいと云ふうちは未だ望もあるが、これは東京の人には知らせまい、見せるのは恥かしいと云ふやうな態度で、一番彼等の生活及び心情に近い事

柄が、殊に吾々の目から遮られる。しかも其遮斷を試みる人が、主として村の吏員小學校長のやうな、有力なる地位の人々であるから困る。

片田舍を歩くと、よく小學校の子供が路傍に待ち受けて御辭儀をする。是は洋服を着た人があつたら御辭儀をしろと、平常教へられるからで、長者を敬ふといふ修身の教程を、多くの小學校教員は此の如く適用するのである。自分はこれを見る度に、心の底で何時も遺瀨無い反抗を感じて居る。

小兒等に何の弱味があつて、見も知らぬ人の洋服を着て車で行くのに挨拶しなければならないか。これは獨り封建時代の慣性として怨する譯にはいかない。その弊害は新時代に入つて一段と甚しいものがある。例へば村に入つて行く土方の親分、或は押賣り同然の行商人が、この爲に洋服を着て行く傾きがある。大黒帽にフロックコートを着て、藥を賣つてあるく所謂オイチニの如きは、巡査でも見て居らぬと、上り口から手を伸ばして病人の脈をとつたりなどする。

これ等の弊害は、方法に依つては或は防止することも出來ようが、學問をする爲に田舍を歩からうと思ふ吾々が、何時も簾や硝子戸の如きものを隔てゝ、物を觀なければならぬ不幸に至つては、殆と忍ぶべからざるものである。

それ程に謂ふならば、髭を剃り洋服を脫いで歩けばよいではないかといふ說もあるが、實は自分も嘗て是を試みてやはり失敗した。和服だと物入れが少なかつたり物にひつかゝつたりして、不便であるのみならず、ちら〳〵と出る太股や足の甲が、いやに生白いので忽ち素性が現はれ、吾ながら馬鹿な仕損じを感ぜざるを得なかつたのである。

旅程の切り詰めてあると云ふことも、是亦避くべからざる不便である。それも一日に三里とか五里とか、所謂急がぬ旅であるならば、自ら途次の見聞も豐かであらうが、汽車は問題の外として、田の中や川の堤のやうな眞直な畔道を、一歩づゝひろつて行く餘裕が無い以上に、町に入り村に入つても、殆と立ち止り後戻りする機會といふものが絶對に無いのだから、總ての事物が河の水の如く、瞬間に流れ去つて了ふ。

洋服を着た人

吾々が最も旅の寂しさを感ずるのは、廣野の眞中に立つた時でもなければ、無人の荒濱に臨んだ折でも無い。朝夕の往來の繁い時に村里を通つて、兩側で呼び交はす女や子供の言葉が、響きばかりで一言も意味の取れない時で、同じ日本に住みながら、何故斯うかと云ふやうな無聊な感じが、ひし〳〵と身に迫る。

しかし考へて見ると、これは東京の市中でも、自動車などに乘つて走つて行く人は皆さうである。話の前後を打ち切つて、たつた二言三言の聲の意味がよく腹に入る場合と謂ふのは、吾々などでも家の子供か何かの言葉でなければ實は無いのである。たゞ旅に出ると、これを深く感ずると云ふに過ぎないのである。つまり昔の行脚僧などの如く、路傍の小家に立ち寄つて茶を一つ所望し、時に依つては愚痴な老婆などの話をも聞いてやるやうな境遇でなければ、得られない機會と謂はねばならぬ。

二

昔の江戸の旅行者の知識慾に富んだ人は、多くは旅宿の亭主又は番頭を呼んで來て、土地の話を聞いたものらしい。今でも地方に依つてはその痕跡が殘つて居る。是が好い宿屋の主人の一つの技倆になつて居つたと思ふ。ところが今日では、此の如き人々は、多くは町會議員などの職務が忙しくて、番頭と謂へば旅の者の、停車場の事しか知らぬ者である。

第二の方法としては、按摩から話を聞くと云ふこともあつた。盲目の者は物覺えのいゝもので、且つ多くは喋るから、自分等も時々はこの方法を學ぶが、實は賴りない話である。田舍道には人力車夫の中にも、實體な土地の農業の模樣などによく通じて居る男が今でも稀にはある。二十年程前迄は、東京の市内にも折々此類の田舍者が出て來て車夫をして居て、思ひ掛け無くも田舍の話を聞いた事があつた。

外國人などは非常に驚いて居る。車の上の人と曳く人と、話をしながら道を歩くと云ふことは、彼等の社會には夢にも想像の出來ぬ事であるさうな。從つて所謂世の中が開けると、相手からそんな氣樂なことは爲ぬやうになり、又護謨輪の時節になつては、息使ひの

音が耳について、自分等でも物好きな話を仕掛けるに忍びないやうになつて來た。

これに較べると、山坂の道を徒歩で行く時に、荷持ちの人足と話をする事は、一番世間にかけかまひが無くて、しかも有益である。併しこれに就いて自分の經驗した意外の事は、十の場合の七つ迄、この人足が按摩人力車夫よりも、更に無識なことであつた。この無識とは、勿論學問の無いことを意味しては居らぬ。唯その住居地の事情を知らぬものが多いと云ふことである。

吾々が田舍を旅行するのは、冬の眞中のやうな農閑の時では無くて、多くは田植養蠶の前後か、夏休みならば除草や水の心配の最中である故に、忙しい働き日は勿論のこと、折好く休みの日に際會しても、土地の百姓で荷持ちなどに出る者が無い。そこで駐在所などを煩はして、人夫の世話を賴むとなると、指されて出て來る者は多くは他所からの有りつき人の、小作ならば二反か三反か、又は純然たる日傭とりで、金を貯めることに熱心な、謂はゞ土地の者からは少しく輕んぜられて居るものが出て來るので、話はとんと要領を得ないことが多い。

たゞ自分などは此の如き場合でも、他所者の其土地に對する觀察如何といふやうな點から話を進めて、出來るだけ利用しなかつたことは無い。按摩でも車夫でも同じであるが、かういふ者の話ばかりを集めて、さも〳〵間諜でも放つて敵の材料を收拾したやうに、是に依つて皮肉な斷定をすることの危險なのは言ふまでも無いことである。

殊に話をして呉れる田舍の人は、謂はゞ一時の師匠であり、少くとも友人である。證人が法廷で聞かれるやうに、聞くのは一方ばかりでは、僅かばかりの酒手の增額では濟まぬ話である。從つてよく〳〵の多辯家でなければ、半途からいやになつて、段々と返事が冷淡になるのである。

此の如き場合も、それが土地の本來の住民であるならば、窃かな彼の利害を察して、多少の相手の趣味を感ずるやうな話をしてやることも出來るが、此場合に於ても、諸所各地を渡り歩いた有りあはせの人足は、利益の交換をするのに誠に都合が悪い。

三

旅行の面白味は、村の形や道の曲り方、珍らしい草の花や鳥の聲等色々の方面にあるが、わけても他の道樂と同じやうに、追々と人を深入りせしむる程の愉快は、遠くかけ離れた甲の土地と乙の土地とが、思ひがけぬ點でよく似て居て、久しく忘れて居た數年前の旅を、旅の空で思ひ出すと云ふやうなことが、多く旅行をすればする程、複雑に且つ味が益〻濃かになることであらうと思ふ。

故に自分等にとつては、假令相手が人足でも子供でも、古い日記を讀むやうなつもりで、昔の見聞を話してきかせる事にして居る。唯意外なのはかう云ふ話を、成るだけ分り易く且つ興味多く、話して聞かせた場合にも、相手の受け答へは多くは至つて冷淡で、人の顔をまじ〳〵と見ながら、「貴君は旅が好きと見える」とか、又は「よくそんなに覺えて居られる」とか云ひつゝも、腹では少しは法螺もあるだらうと聞いて居ることが、顏の色で好く讀まれるのである。

かう云ふ折には、自分の空想は殆と止まる所も無く走つて行く。彼等の祖先は、恐らくは千年も千五百年もの間、冬になれば炉の邊で、自分等よりは今一段分り易い方言で、こんな話をしつゞけて來たのであらう。要するに話は多のものである。白晝青天井の下で、しかも躑躅や谷うつぎの咲いて居る山道で、この様な世間話をすると云ふことは、こちらは面白いかは知らんが、彼等にとつては實は調子が合はぬ。

成程冬の榾火の傍の話は單調であつたかも知れぬ。その集團の中に一人の旅商人、又は六部などが混つて居ることは、二年か三年に一度位の稀な場合で、多くは村人のみの群の中へ、三傳四傳して遠隔の話が屆いて來る。これに較ぶれば、自分等がして聽かせる話は、生粋の新知識で、しかも成るたけ爲になりさうな部分を選んでするのであるが、何分にも前に言ふ境遇の相違は、一日や二日の交際で徹却し盡すことが出來ぬのである。

それにも拘らず一人で旅をすると、相手の農夫が解らんでも、云はずには居られぬやう

な面白い記憶が、何度も胸に浮んで來ることがある。かういふ折には自分は常に決心をする。

東京へ歸つたら紀行を書かう。あの材料をつけ足して、あの書物を參照して、この問題だけは明かになる論文を書かう。さう思つて二日も三日も、その腹案を練りながら旅を續けることがある。

併し東京へ歸つて見ると、いつの間にか其決心は非常に遠いものになつて、實行しなくとも差支へ無いやうな考へが强く起る。是だけ心持が旅と家とは違ふのである。

偶々それでは自分に濟まぬやうな感じがして、强ひて意志を强固にして、旅行の見聞談を中心とした雜誌を拵へて見ると、滑稽なことには、それが自分を束縛して、厭になつても止められず、書物を讀む暇を缺く。殊に可笑しいのはその爲に旅行が出來なくなることである。

自分の机の引出しには、その後一度も開けて見たこともない旅の手帳が、何十冊も轉がつて居る。中には鉛筆の痕も薄くなつて、殆と頭の記憶と同じ位の消え方をして居るものもある。

然も自分には一つの空想がある。幸ひに長生をして閑と火鉢が唯一の友人であるやうな時が來たら、眼鏡をかけ、その手帳を取出し、一つづゝ昔の旅を思ひ出さうと云ふのだが、それの空想であることは不幸にして何れの點から見ても明白だ。それよりも少しづゝ獨り言のやうに、これを話して見たら、讀者は自分の連れて歩いた人足よりは自由だから、自分の行く先迄ついて來なければならぬ必要もないから、お互ひにやゝ氣樂な交際が出來ようと思ふ。それに申し後れて相濟まぬことだが、趣味の多いこと及び準備知識の豐かなことにかけては、以前の自分の話相手とは比較にならぬ讀者諸君である。自分はその人々の前に、旅の話をすることを幸福と思はねばならぬ。

四　旅の手帳

さて如何に物わかりの好い田舎者に對しても、自分がとても話しても駄目だと思つて居た一つの感じを、此機會に先づ述べて見たいと思ふ。

それは我國の村の成立ちの異同を云ふことである。違つて居るといふ點から見れば、小山一つ隔てゝも屋根の形から、厩の付け方から、どうにもなるものを丸で違へて居るが、同じと云ふ點から見れば、三百里五百里と隔つた東西の山の中の村で、眞似をしようもない徹細な點が、符節を合するが如く相同じい。この二つの方面が何れか一つで無いから、説明は更に困難である。何故に或物は著しく違ひ、何故に或物は著しく同じきかと云ふことを考へると、國殊にわが生れた國の歴史ほど、無盡藏の問題を提供するものは無いやうに思ふ。

抽象的の話は成るたけ避けたいと思ふから、爰には或一つの小さな例を擧げて見る。肥後の五箇の庄と峯一重を隔てた日向の奈須と云ふ山村には、九年前に自分は往復七日を費して巡歴したことがある。その村の或部落に宿つた夕方、厩の口に働いて居るもの〻腰に、珍らしい形の一物が下つて居る。ちようど薩摩芋の大きさの藁苞で、末を繩にして腰帶に結び付け、その一方が燻つて居る。

それはカビと云ふものであつた。夕暮になると農家の周圍に群衆する蠓子（ブヨ）を追ふ爲に、常に少しづゝ烟を上げて居るので、此村では「カ」をいふのは蠓子のことである。藁苞の中は蕨のほどろ（蕨の根から蕨粉を取つた粕）で、藁苞の巻き方の加減に依つて、火が消えず、又永く持つ樣に出來て居る。

この製法を自分はよく見たが、殊に新らしく感じたのは、古くから和歌にも讀んで居る夏のタのカビは、吾々が蚊帳を以て防衛して居る蚊で無かつたと云ふことで、その時はまだ或はこの地方だけの特例ではなからうかとも考へて居つた。處がそれから、三年程の後、越前の大野郡の山奥で、白山の登山口の一つなる石徹白（イシトシロ）といふ村に宿つた晩、やはり門口に出て見ると、働く人が皆腰に同じものを下げて居る。中に入れた物質は蕨のほどろでは無くて、粟や稗の穗の殻を下した殻であつたが、その藁苞の寸法から腰繩の長さ迄、寸分

も日向のものと違はぬのみならず、その名も同じくカビであつた。

翌朝未明に此村を立つ時には、自分も興に乗じて腰にカビを下げて出たのであつたが、其後飛騨あたりの方言を注意して見ると、山村一體にカといふのは蟆子即ちブヨのことで、蚊をば特にヨダと呼んで居る。

この類似は成程微細なことであるが、自分が之に依つて思ふことは、平坦部の都會では既に久しい間忘れてしまつたカビといふ品物を、西と東との山奥に等しく分配したものは誰だらう。細かく調べれば蓑苞の堅さ、外形寸法からその勾配迄、實際の必要に合ふ様に工夫をしたものは、果して或一個優秀なる先輩の力であつたか。これを考へることが日本の社會研究の、一つの發足點では無からうかと思つて居る。

それから更に考へるのは、これも北は奥羽の果から、南は薩摩日向の果まで、山水のある處には必ずある米をしらげる水車の如きも、果して傳搬か又は自然の發達か、中々容易には決せられない。

この方はカビと違つて、地方により方言も變り、或はバツタヌと云つたり、サコンタラウと云つたり色々の名があるが、その形式に於ては殆と違ふ處が無い。しかも米をしらげるといふ必要の田舍に起つたのは、さして古いことではないのだから、或は見様に依つては誰か隱れたる愛國者が、全國を經廻つて教へて歩いたとも見られるが、カビに現はれた如く凡人の智巧が、結局同じ方向にしか向つて行かぬものとすれば、この水車に限らず、井戸を掘る方法なり、石垣を積む術なり、屋根棟を押へる手段なり、かく一樣に恰も花園の花が開く如く、共に開けて行つたとも見ることが出來るし、從つて國といふ共同生活の靈妙さは、こんな點からも窺ひ知ることが出來るのである。

五

しかも流れを隔て丘を境して村の形が違ふと云ひ、生活の狀況が異つて居ると云ふのは、これにも亦意味があつて、一つには出て來た本郷の相違に歸すべき部分も勿論無いとは謂

サコンタラウ

はれぬが、それよりも強い原因は地理上の條件、土着時代の先後が此の如き様式を必要とするに至つたので、言葉を代へて言へば、村には外部の狀況に依つて、色々の種類がある結果となるのである。

これを又實例で證明する爲に、此次には一つ試みに燃料の側から村の種類を見ようと思ふ。

關東平原のやうな一見單調な地方にても、十里二十里の短い旅にも、よく觀ると村の形式は殆と一つ〳〵違つて居る。出來るものならこれ等を分類してみようといふことは、昔から人の時々に考へたことであるらしい。確か備陽記であつたかと思ふ。村ごとに其種類を擧げて居る書物がある。例へば平場（ヒラバ）は字の如く、平衍なる土地を區劃して住する村である。山寄（ヤマヨリ）は美濃では赤坂以北、又は駿州の愛鷹の南面などによく發達して居る形式である。海添（ウミソヒ）山添（ヤマソヒ）なども右の備陽記には擧げてあつた。

この外同書には山上（ヤマノウヘ）と云ふやうな一種類が擧げてあつたが、他の地方に於ては最も例の多い谷入（タニノイリ）の村は、自分の記憶では別に一目を立てゝ居なかつたやうに思ふ。備前邊でば入と名づけるやうな狹い谷奥の村が、餘り無いからであらうか。

この分類は勿論周到ではない。同じ平場と謂ふうちにも二通りある筈である。例へば目前東京府の管内に於ても、南葛飾郡の如く、僅に屋敷乃至は道路が水面から少し現はれて居るやうな低地もあれば、北多摩郡の如く一體に溝川の乏しい所謂野方（ノガタ）の在所もある。

又同じく海添の村と謂つても、山の陰などに僅かに部落をなして居る村と、追々に遠干潟を取圍んだ埋立地の新田場とは、丸で事情が違ふのである。川添といふ内でもこれと同樣に、中流以下の堤が無ければ安全で無い村もあれば、更に又以前の堤よりは外へ出て、水荒れの跡地を開いたやうな村もある。

是迄の人はさまで注意せぬことであつたが、村の大きさ即ち戸數の多少といふことも、

村分類の一標目でなければならぬ、所謂小村は最初から小村でなければ作れない土地に出來た村であつて、從つてその成長發達に對する制限も、將來の運命も、常に中村大村とは一樣でない。

昔から村役人の云ふ言葉「何分私の村は小村で」といふのは殆と口癖の樣であるが、實際古い時代の開墾が廣漠の地に初められて、存分に地形と地積りをした後へ、新たに入り込んだ村は何かにつけて窮屈であつた。

天保年中に長州の藩で作成した周防と長門の風土記は、頗る村の生活條件といふ點に注目してゐる。村の地理關係を簡單に叙述してあつて、この點に關しては却つて近年各府縣に於て町是村是など、名乘りをあげて居るものよりも要領を得て居る。後者は重きを計數におき過ぎるが故に、却つて村の性質、人間で言へば大樣だとか、神經質だとか謂ふやうな特徴をつかまへることが六つかしかつた。

しかしこの防長風土記には、名目をあげての村の分類はして無かつた。自分の思ふには、百以上の村々を綿密に視察した上は、一々について用水の過不足、草刈場の有無薪炭地の廣狹などを細述せずとも、自ら村の種類に依つて此等の結果の違ふことを推定し得たことであらうと思ふ。

明治二十二年後の新町村は、昔の村の七つも十も包含して居るから、一村を通じてその生存條件を概括することは六つかしくなつた。是が合名會社なれば、昔の村は生れた儘の所謂自然人であつたのだから、村一つは常に略一つの形に生れついて居た理だ。今日町村を論ずる事は出來る限り新しい團體を一個人格として見なければならぬが、この問題に就いては又少なくとも部落部落を區劃して考察する必要がある。

さて今の如く分類した村の種目が、吾々の觀察に如何なる便宜を供するかと謂ふと、今後の村の生活方針を定めるのに、やはり體格の立派なものが陸海軍を志望し、手足のか細いものが手藝技術を職業に撰ばねばならぬ如く吾部落の生れつきによつて、將來の方針が違はねばならぬと云ふ說明に最も必要なのである。

大村・小村

然るに現今の模倣主義は、足を踏み込んだことの無い遠方の府縣の模範村の報告などを讀んで、直ちにその役場の事務ぶりを眞似ようとし、然らざれば理もなく隣村の良い成績を羨んで、末梢の點に於て人の行く後をあるかうとする。いづれも村落として自省が足らないのである。江戸時代には村々の明細記のやうなものを名づけて村鏡（ムラカゞミ）と云つた。自分は田舎の人々に向つて、この最も新しい意味の鏡を贈りたいと思ふ。

六

是まで田舎を研究する人が、さして重きを置いて居なかつた問題で、自分が特に注意を感じて居るのは燃料の問題である。これについては順序として說かねばならぬ個條が幾つかある。

成程都會の住民が感じて居るほど、地方の人が燃料のことを念頭に置かぬのは、以前には理由のあることであつた。町の保護多き且つ多感的な生活をして居る人々は、日本の如き溫暖の國に住みながらも、冬は炭桶を想はずには居られなかつた。これに較べるとかの古歌にある、栲衾（タクブスマ）さやぐが下にといふ歌もあつて、貴人と謂はるべき方々までが、樹皮を以て織つたガサ〳〵云ふやうな夜具をかけて寢れば、寒中も麻で織つた衣服を素肌に着て、足袋など〳〵謂ふものも用ゐなかつた時代もあつたが、今では綿フランネルのシヤツが在所迄も入り込んだ時代である。粗末な襟卷頭巾の類が、小さい都會で賣れる分量は中々大きい。

又割烹用の問題を考へて見ても、以前よりは鍋で煮る品の種類が遙に數多くなつたやうだ。然も金を出して田舎の薪炭を買ふ人の數が非常に增して居る。山の木は追々と小さくなつて乏しくなる。少なくとも日本の田舎の三分の一位の者に向つては、燃料の問題は殆と彼等が戸口に來て覗いて居る、然るに公の生活に心を勞すべき人々が、今尙この點に考へを及ぼさぬのは奇怪なことゝ思ふ。

それで吾々の知らぬ間に、この百年の間にも農村の經濟は烈しい變遷をして居る。昔の

農村の思想では、木と草とは大きな差別が無くして、共に手間即ち勞力を以て收得し得るものと考へて居た。尋常農村に用ゐる鋤鍬その他の農具の木部や折敷の類は勿論、農家の建築に用ゐる木材まで、自ら採收することを得たものである。偶〻面倒な工作を必要として他人を雇ふ場合にしても、これに支拂ふ物品は、物の價では無くして勞力の報酬であつた。農村の作物が多くなり、技藝に對する好尚が進むと共に、これ等木具の一般は商品となつたのである。それでも中以下の生活をする農村の豫算に於ては、殆ど謂ふに足らぬ金額であつた。

燃料の如きは折つて來て市に賣ればこそそれを價のあるものと見るが、農村自身に於ては井を掘つて水を汲み、乃至は川に就いて魚を捕へると同然に考へて居り、又左樣に考へることを得たのである。

卽ち始めて山野を區劃して新村を興立するものには、水は好いか日當りは好いかと言ふことを考へると同じやうに、燃料があるかと云ふことを考へ、それを開發の一條件として、居つたのであり、今一つ以前に遡れば、これすら問題とはならず、草や木は刈り捨て燒き捨てる必要すらあつたのである。

所謂山寄山入の村が最も早く起つた理由は、單に用水燃料の必要からでは勿論無いが、昔の人が單に薪の手に入る處を條件としたのみでなく、能ふ限り少ない勞力を以て、これを得ようとした希望も原因となつて居たのである。

故に後々部落が幾つかに分れて、愈〻境を劃さなければならぬ事情に臨んだ時は、多くの場合にはその堺線を谷と直角に切つて、山も野も川原も水も、それぞれ各部落の地域内に含まれるやうに努めたものである。

然るに世の中が平和になつて人口が增殖し、堤を築いて河を防ぎ、竪井戸を掘つて水を上げる技術が進んだ所から、從前家の後に負うて居た山や丘から追〻に立離れて、所謂平場の開墾を自由に初めるやうになつた。これが人口增殖の第二期とも云ふべきものである。但し同じ平場と謂ふ內にも、火山の裾野もしくは河に臨んだ段丘地等は、本來雜木を以

て蔽はれて居た地であるから、水利の問題さへ解決すれば、燃料の問題は顧慮することなくして、早くから入込むことが出來たのであるが、今一段と低みの川原又は濱方の地で、蘆薄ばかり茂つて居たやうな土地を開くことは、何か新らしい事情が燃料の供給を保證しなければ、出來なかつた仕事である。

自分の觀る所では、これ等の地面が耕地に變形したのは、村の出來たのよりは餘程前のことであらう。卽ち一里二里の距離を本村から通ひ、收穫の前後には所謂かりほのいほを作つて番をする。それでしかも寒い冬の間は、やはり昔の山陰に還つて薪を焚いて居つたのであつたが、兄弟叔父甥の家を分たねばならぬ時節になつて、いつとなく今の低地を以て、安住の地となすに至つたのであらう。

それでも最初のうちは燃料や草に苦勞をするやうなことは無かつたが、土地も開きつくし人も多くなつて、愈〻それが不足と決つた場合には、本村と新田の關係をたどつて、山方に入つて薪を乞ひ、草を刈ることを許して貰つた。これが今日の所謂入會山（イリアヒヤマ）の起原である。

今日の民法でも認めて居る如く、入會には明らかに二つの種類がある。一つの野一つの小山を取り圍んで數戸の村がある場合、その野その小山を共同の採薪地として居るもの、これが所謂第一種の共有の性質を有する入會である。第二種は民法では新らしい言葉を使つて、地役の性質を有する入會と呼んで居る。これが自分の玆に謂はうとするもので、この種の入會には必ず山口もしくは山元と稱する一ケ村があつて、他の村々はその村の許可の下に入會する事を得て居るので、普通の地租分擔額の外に、これに對して山手米野手錢（ヤマテマイノテセン）の負擔をして居ることも珍らしくない。

自分も幼少の時から見て知つて居るが、遠方に入會山を持つて居る村々の若い者は仕事が樂でなかつた。初夏の頃から初冬まで、一番鷄と共に起きて、馬を飼ふ在所では馬を曳き、馬を飼はぬ在所では荷繩と杁を擔いで山に入り、日暮れでなければ歸つて來ぬ。一駄の秣草一荷の薪の爲に遠い途を往復し、しかも往々にして山道で地元の青年等にいぢめら

れたりからかはれたりする。

殊に刈敷と稱して雜木の若葉を田に入れる頃は、日數も短かいので一層骨が折れたやうであつた。こんな村々は多くは交通の便のある處で、農產物が相應の價に賣れるにつれて、天然の綠肥を輕蔑し、人造肥料その他の金肥を無暗に使ふのは、勿論勞を厭うてのしわざには相違ないが、事情を察すれば幾分無理もない所がある。

大都會の生活が田舍に影響した第一着は木材の需要であらうと思ふ。一箇所の町だけに就いて考へて見ても、何度となき大火は一時に數千の家を燒き拂つた。短期の改築、諸侯富豪の立派な普請、其他各地の城下に向つて年々運ばれる樹木は莫大なものであつて、近くの山の木を以て住居の需要に應じて居た昔の組織は先づ壞れた。勿論全國の山を掩ふ樹木の成長率は、久しい間これ等の需要に應ずるに足りたけれども、所謂出しの惡い奥山は計算の外であり、平地に近い謂はゞ需要者の附近に居る山々の木が、先づ切り倒されて筏（イカダ）となつて下つたのである。

七

この事實は二つの結果となつて現はれて居る。一つは山の木に値が出て、小民が無代で小屋掛けをすることが出來なくなつた事、これが地主小作關係に於てある結果を生じて居る。第二には山が伐木により露出した山腹の土が、追々と海へ流されて各所の浦入江を埋め肥沃なる遠干潟を作つたことである。

その頃になると、僅かな資本で小規模に開くべき地面は、もう大部分出村となつて人が住んで居た。幕府並に各藩で、一度確立した商人地主禁止の方針をやゝゆるめて、資本のあるものに有利な條件で用水路を掘らせたり、潮止堤を築かせたりしたのは、止むを得ざる事情であつた。玆に於てか全然抹草山薪山と絶緣した新らしい形式の農村が、頻々として各地の海添川添に起つたのである。これを計劃した都會の住民と同じく、農家が燃料に向つて金を支出しなければならぬ事情は、この時から既に發現したのである。

越後の蒲原平原を歩いて見ると、處々の溝河の中まで立臼（シヤクス）を小形にしたやうな木が流れて居るのをよく見掛ける。たしかあの邊でもこれをコロと謂つて居るやうである。卽ち農村が薪を買ふ著しい一例である。恐らくは信濃川沿岸の低濕の地や、處々の渦端の地が、所謂商人地主に依つて開發せられた時代からの現象であらうと思ふ。

この蒲原一帶の水田は、農夫が臍あたり迄も泥に浸つて耕耘をする。所謂ふけ田の優なるもので、田の畔の代りに蘆をたて〳〵置くやうな有樣で、稻の架乾しをするハサキ又はハデの材を得るにも難儀をする位だから、竈に木を焚かうとすれば勢ひ、水源の產地から、遙々コロを喚ばねばならぬのである。

自分はあの地方を歩く時に、薪を買ふ者が如何にして自他のコロを辨別するかと云ふことを知らうと努めたが、どうしても分らなかつた。今のやうな生活の激しさでは、昔のコロ流しは到底永く續かず、さりとて番人を付けて五十八十のコロを流して居つては、愈〻燃料の增費を免れぬ結果に至るであらう。

川に流した薪は、今れも樹皮が無くなつて、後先きが丸くなつて居る。多くの漁村では昔からこの類の木の主知れぬものを拾つて、無代の燃料をつかつて居たらしい。年に二度や三度は洪水の起らぬことは無いといふ日本では、流木の海に漂出し、又は川底に埋まる分量も相應に多いことゝ思ふ。その失費が悉く薪の市價の內に加はるのである。

漁民の薪は此の如くにして久しい間無代であつた。鹽木を拾ふと謂つて、以前は鹽釜の燃料すらも漂流木で間にあつた位である。今でも邊鄙な漁村を歩いて見ると、見事な材木を打ち碎いて薪にして居る處もあつて、これ等は悉く河口の大水に依つて、主の不明になつた木である。今後追々各地の材木商が店員をして浦々を歩かせ、燒き印を迫つて漂木を取戻して歩くやうになるであらうから、漁村に於ても燃料の問題は今一層痛切に感じられるであらう。

阿波の吉野川の谷を下つて見ると、川添の村々ではやはり擂木の如く兩端の丸くなつた木を、家々の壁の際に積上げて居るのを見かける。この邊でも出水後に漂流木を拾ふ外、

燃料を得る手段の無い人民が、可なり多數に住んで居るらしい。

多くの山川の川原などを觀ると、砂原の小石混りの中に木の端が頭を出して居るのが時時ある。出水後には特にこれが多いので、激しい勞働の出來ぬ婦人老人などが、恰も蛤でも掘るやうにこれを土中から掘り上げて、乾して薪にするのだが、上流の土佐の本山本川筋の村の人々には、この事實を好く知つてよんどころ無いものと考へて居る。多くは態々流した木では無く、出水の爲に倒れ込み流れて下つたものであるらしい。

自分は秋の初めこの吉野川の川流を下りつゝ、多くの里人が川原に下りて木を拾ふのを、つく〴〵と見て居たことがある。戲れて「婆あは川へ柴刈りに」と謂つたことを、今でもまだ記憶して居る。

八

新潟縣などのやうに、薪材の多い山を間近かに控へて居る處では、コロを買つて竈に焚くことも、或は無理で無かつたかも知れぬが、それとても追々に杉檜が植ゑ立てられ、村持薪山の狹くなり且つ荒れて行く今日となつては、果して將來の便宜を期し得るかどうか。殊に賣らうにもさう澤山の米が殘らぬと云ふ小作人の境涯では、何か別種の燃料供給方法を、待たねばならぬのは自然の話である。

尾張の海部地方（元の海東海西）なども、一望木の無い埋立新田で、乾いた土は僅に堤防の附近でなければ求めることの出來ぬやうな事情であるが、此邊では溝川づたひに薪を流す風習は少しも無かつたやうで、大きい地主の家庭では、恐らくは薪炭商の手から薪炭を買ふのであらうが、小民は總て藁を燃して居るやうである。それと云ふのが此邊では、舊程上流へ行かねば木の立つた山も無く、從つて薪の價が安くないのと、一方には小作人の耕作反別が、越後などに比しては一層に狹くて、燃料の爲に金を拂ふことは、絶對に經濟許されぬからであらうと思ふ。

近年排水の工事が進んだから面目を一變したけれども、その以前はこの邊一帶も田舟に

乘つて稻を刈ると云ふ場所である。水場の稻は草丈が非常に高いものである。さうして永い間水に浸つて居る爲に、外の用には適じないから、誠に彼等にとつてはうつてつけの燃料である。

殊に經濟組織の進んだ處では、藁を焚く農家の竈から、藁灰を他の地方に供給する商賣があつたのである。尾張西部などでは、主としてこの藁灰は中島地方の野菜耕作地、其他桑や苗木などを作つて居る畑場の方面へ、これもやはりこの低地を縱橫に貫流してゐる溝川を利用して、運搬せられて居るのである。

諸國の城下の町に往々にして灰屋といふ屋號などのあるのは、恐らくは肥料用の藁灰を大規模に賣買した痕跡であらうと思ふ。武藏野でも川越の町には久しい以前から、月々の灰市といふものがあつた。川越は人も知る如く、畠作の行はるゝ高臺地と稻作の盛んな低地との、境界線上に出來た一番大きな町である。川越の灰市は畑場の根菜類が灰を肥料として要する爲であることは勿論であるが、同時に又この國東半分の農場で、盛に藁を燃料として居つたことを證明するもので、地圖の上では多くの意味も無いやうな屈曲した大小の溝川が、運送費用の節約を助けて居たことは誠に豫想の外である。

處がこの藁灰に就いても、亦一個の小さな時代の影響を、受けねばならぬ機會に逢着した。それは何かと云ふに、稻藁の要途の擴張である。近代の農事改良では、牛馬も飼はねば草生地も無いやうな村々までに堆肥の奬勵をして居るが、今日の稻藁はムザ〳〵腐らしてしまふには餘りに高價になつた。

先づ第一には藁製品の需要の增したことである。日本海沿岸の諸縣、殊に東北地方の北海道に近い農村から、年々供給せらるゝ叭・俵・繩・草履の類は、集まつては非常な金高で、優に大資本の商人を活動せしむるに足るばかりである。獨り北海の漁業地方と謂はず、內地でも鑛山又は工場に於て、これ等の物品の需用は年一年と增して行く。

又個々の農家の生活に就いても、以前草鞋を履いて居たものが下駄や靴になつた代りに、徒跣足の連中が草履をはくやうになつたことは非常なものである。

今一つ注意せねばならぬことは、疊の床としての藁の需用である。これ迄はスノコに蓆を敷いて坐臥して居つた農家が、粗末ながらも普通の疊を敷き詰めるやうになつたことは、必ずしも一地方だけの現象では無い。常は板敷を便とするやうな百姓家までが、且つは名聞の爲に、室の片隅に疊を積み上げて置くといふ實例も、自分は各地方に於てこれを見た。

麥稈の方は麥稈眞田の原料として世に知られて居るが、これは至つて小部分で、その他は各自の屋根を葺く位より以外は、これと云ふ用途も無いけれども、稻藁に至つては今や既に立派な商品、農家の簿記には收入として新に掲げねばならぬ項目になつて來た。この事情を助けるものは、やはり鐵道その他の簡便なる運輸方法である。

嘗て肥後の球磨川の岸にある坂本と云ふ製紙工場を觀た時に、原料の藁がどの邊から來るかと尋ねて見ると、遠いのは岡山廣島あたりから來てゐる。これは品質を選擇する爲では無くして、單に安く買入れんとするが爲に、米產地たる熊本縣をさしおいて、これ程遠方の品物をも捜すことが出來たのである。

九

話がそれるが、日本で西洋紙の工業が起つた最初の動機は、原料に適する稻藁が無代同樣であるといふ事實が、慥かに其一つであつた。然し今日では最早それは斷念すべきこととなつたらうと思ふ。

此の如き諸方面の需要に加へるのに、馬を廐舍で飼ふ陸軍の秣用も亦決して少額ではない。結局これまで心安く藁を結んで、竈の中に投げ込んで居つた小農の家では、是等各種の競爭者と對抗して、この燃料問題を考究しなければならぬはめに陷つたのである。例へば愛知縣の如き交通の便利な、小農の金勘定に銳敏な村落に於て、排水土工の進んだ後、世間並みの藁が出來るやうになつてから、彼等は藁をさへも澤山には燃しかねるやうになりはせぬかと思ふ。

日本人は今日迄も生の食物を多く攝取する人民であつたが、今もし燃料の關係から燒く

べき魚も燒かず、よく煮るべき野菜も少しゆでて食ふといふやうな癖を生じたら、問題は單純な經濟問題では無くなつて、しまふのである。

自分は嘗て籾殻の燃料としての使用を考へたことがあるが、蠶の敷物にこれを使ふ農家は別として、普通の百姓は久しい間、實はこのもの〳〵始末に難澁して居たのである。時に依つては田の中に掻き集めて面倒を見て灰にしたり、或は灰小屋の中でこれを處分する爲に、特に努力と費用とを投じて居つた。もしこれが一部でも燃料として用ゐられて、稻藁を節約することが出來たならば、一擧兩得と謂はねばならぬ。

これも愛知縣のたしか三河方面で、籾殻を焚く竈を工夫した者があつた。勿論藁のやうにパツと燃え上つて、心地よい火で人を樂しましめることは出來ぬけれども、取扱ひやうに依つては少なくとも補助燃料、卽ち火をつないで置く用途には供することが出來る筈である。どう云ふ風にか工夫して、便利な竈を小農に與へたいものだと思ふ。

自分の經驗によれば、農家には早くから燃料節約の氣風は行き亙つて居たやうである。よく金錢を湯水のやうに使ふと云ふが、吾々の目から觀れば農家では、湯も中々粗末には使はぬ。例へば風呂に入るにしても、都會でなら一人入る位な湯に、近隣の者を招いて、成るだけ水もうめずに、微溫くなつて初めて薪物をくべるといふ有樣で、今日迄身體を清めて來たのである。

この類又は沸騰の必要の無い湯などには、籾殻を代用して最も適當であらうと思ふ。藁を焚く竈の一つの不便は、誰か一人竈の前につききりにして居なければならぬことである。屢〻灰を掻き出して藁を投げ込むやうにせぬと、不經濟でもあり又危險でもある。この點に就いては一抱へもあるやうな榾（ホタ）を爐の片隅へつき込んで、終日ブス〳〵と燻らして居る山家の人々は氣樂なものである。將來農家の勞力が充分に利用せられて、薪を刈りに行く手間も惜しいと云ふやうな時節が來れば、この點から觀ても藁は農家の燃料には不向きである。自分は觀たのでは無いが、三河邊の人が考へ出したと云ふ籾殻の竈は、中に金網か何かゞあつて、自然に少しづゝ火の氣の絕えぬだけに落ちて行くやうになつて、然も火の

用心も悪くなく、野良から歸つて見ると湯が沸いて居ると云ふやうなこしらへだといふ話である。事によると是が一つの燃料問題の轉機をなすのかも知れない。

一〇

尙少しく村を見て歩く面白味に就いて話して見よう。日本人は種々なる骨格、種々なる肌の色艶をもつて居て、如何にも混合した人種の如く外人等より考へられて居る。吾々が見ても此人はどうしても蝦夷の末に相違ないとか、爭はれぬ南洋人の特徴を以て居るとか、感ぜられる例に、幾らも遭遇する。

併し假りに此推定が當つて居るとすれば、尙一段と意味深いのは、系統の異同が地方的で無いことである。卽ちどの村へ行つても、三種四種の顏だちが雜然として混和し、恰も最初から一部民の如く共棲して居るのである。

何でも吾々の祖先は、今日の安住の地を相する迄に、少なくとも二度三度の國内移動をしたに相違ない。戰亂の爲に追はるゝ不幸は、他の國民に比すれば少ないのに、人口が過剩するごとに、都會を造らずして新たなる山野を拓いた。これは多分中世以前の社會組織の特質に基くものであらう。つまり吾々が祖先は、國柄か人柄か知らぬが、兎に角優秀なる造村の伎倆をもつて居た。大陸の廣漠たる平原に居る者の〻夢想だもする能はざる巧者を以て、山腹又は水際に邑落を造つた。

この無意識の技藝の出來榮えを、吾々は到る處に見ることが出來るのである。もし相應の同情と研究心とを以て掛るならば、此の如き村を造るに至つた昔の人達の心持を、隨分明瞭に知ることが出來るだらうと思ふ。

初めて村を相する人々にとつて、燃料よりも更に重要な條件は飲料水の供給である。今でこそ薪に價はあるが、開發の當初に於ては刈つて捨てねばならぬものが皆薪であつた。之に反して、地表に澄んだ水を常に得るといふことは、決して容易では無かつた。勿論初は鳥や獸も共通に、流れ川の水を掬んだに違いないが、多數の者が河の岸にのみ住んで

居られぬことは當然の話で、殊に耕作に適する平野は流れから離れた處に多く、屋敷を定めるのは何れか一方を遠くにもたねばならぬことになる。

伊豆の海島では今でも飲水を得る爲に、婦人の勞力の半分を費して居る。內地の日本では幸にして、甕を頭に乘せて遠く歩くやうなことを要しなくなつたが、それにしてもやはり水を掬むといふことは、可なり大きい勞働の一項目であつたと思はれる。

深山に入つて見ると、獵人や樵人がカラ澤とか水無澤とか名づけて置いた谷が往々あつて、水を大事にした昔の山民の心持がよくくまれる。

山の多い我國のやうな地形では、到る處に水の音を聽き得るやうに考へられるが、それはまだ平野に近い淺い山の事で、繁茂した樹林地の中では、却つて流れに出逢ふことは少ないものらしい。

それでも昔の拓殖者は、出來る限り水の流れを離れまいとしたに相違ない。水の流れを傳ふことは、道の無い未開地に入り込む爲にも必要なことである。

しかし穀物を作る面積が不足になるにつれて、どうしても水の音の聞えぬ處へ引移らねばならぬ必要はやがて現はれた。此時に當つて彼等にとつて大和の八咫鏡よりも貴重なものは、處々の淸き泉、卽ち地下水の露頭であつた。

その時代の事情は、武藏の平原を歩いて見ると、到る處にその痕跡を止めて居る。人のよく知る如く、武藏野名物の一として古くから、堀兼の井と逃水がある。堀兼は今でも堀兼村などゝいふ村の名もあるが、果して或一個所だけの話であつたか否かは疑はしい。逃水に至つては色々の說がある。或は苦水（ニガミヅ）のことで、作物に有害なる潮水をいふとの說もあるが、その樣な海岸近い地方の話とも思はれぬ。或は又野馬陽炎の類で、水ありと望んで行つて見れば其處には何も見えぬといふ、沙漠のオアシスのやうな話も傳へられて居るが、これも名稱から起つた想像說らしい。第三の說として今まで流れて居つた河が冬に無くなつて居るのが逃げ水で或は川越の附近に年不取川と稱して、大晦日の晩ばかり不意に一滴も無くなる川があるといふ說もあるが、此後半に至つては明らかに浮說で、

必ずしも或一箇所の狀態では無く、この平原の地形として、屢々地下水の出沒することを意味する普通名詞であつたらうと思ふ。

川が地底を流るゝ例は諸國に多い。飛驒の一ノ宮などでは、明神が法樂の聲を防ぐるを惡むで、社の附近ばかり、水を底へ移されたといふ口碑が出來て居る。他の多くの流れでは、滿水すれば上を流れ、減ずれば所謂水無瀨川になるので昔人の知識ではこれを神力に歸するやうになつたのである。

攝津の丹生の山田には有名な山田の白瀧話がある、白瀧姫の子孫が名乘つて居る栗花落と書いてツユリといふ苗字は、地下水の出沒に基づく口碑の類で、他の諸國に於ても折々聽く話であるが、つまり栗の花の落ちる梅雨の頃になると、常は水のなかつた靈地の一隅に、清い水の湧くのを水神の奇蹟としたのである。

近世の井神樣は水を汚す者を治罰する至つて消極的の神樣であつて、殆と何の爲にこの神を崇拜し始めたかを、想像することの出來ぬまで變遷して居るが、開國初期の平民生活の光景を推想して見ると、水の神の神德を拜まねばならぬ理由がいくらも有つたのである。

そこでたちもどつて武藏野の散步の話をするが、東京の市民が二百年の長い年月、飮んで居た處の井之頭の池を初めとして、相染川でも日暮川でも、それから石神井川でも、今では殆と民家のセヽラギの末の如く見做されて居るが、試みにその岸に沿うて溯つて見ると、源は何れも一箇の泉である。

水が豐富なれば湛へて淸い小池となり、それ程充分に無ければ井と稱して柄杓を以て掬むのである。思ふに井戸の井は居(キル)の キと同じ語であらう。簡朴なる古代の日本人は鳥が木に棲むのも、水が流れて澄むのも人が屋敷を開いて住するのも、等しくスムといふ同じ言葉を以ていひ現はして居た。それが後に分化して、河水を堰で止めたものを井堰と稱し、飮用に供する細小の瀧壺に、井の字を當てゝ井戸(井處)井カハなどゝ讀んだ迄である。

東京から西へ三里四里を出て見ると、高い森があれば宮があり、宮があればその一側が

此邊で謂ふハケ(崖)になつて居て、小さな井の頭が現はれて居り、その附近に若干の家があつて、流れの末が田に灌いで居る。

だから丘の谷合などに帶の様な細い田地のある處を横ぎる時に、もし道を曲げて西又は北の一方へその田に沿うて行けば、必ず宮をめぐつた小さな部落に衝き當るわけである。多くのこの清水は、今では御手洗などゝ稱して普通の用には汲まぬことになつて居るが、これは人家の數が增し、縱井戸を掘る術が進化してから後の事で、必ず初めて社を祭つた時の狀態のまゝで無いであらうと思ふ。

泉と神社との離るべからざる關係は、近頃自分が殊に興味を以て研究して居る事項である。此場合に問題となるのは、此二者と村との相互關係である。この三者の內で、清水は天然のものであるから最も早くからあつたとして、他の二つの社と民家と、通例どちらが先に出來たものであらうか。

例へば往來の人々が清水の所在を發見して、その恩惠を感謝する餘りに、幣を立てゝ神を祭つた處へ、後に一軒出來二軒出來て、通例いふ宇宮前などの部落が出來たものか。乃至は又水について居を占めた五七軒の農民が、その泉の涸れずに永く澄むことを願ふ處から、泉の神を祭るに至つたか。同じ武藏野の中にある村々でも、事情は必ずしも一樣でなからうと思ふ。

二

最初此國がなほ平衍なる林叢を以て掩はれて居た時代には、家を構へるにも旅をするにも、水といふ問題は今日よりも遙に重要であつたかと想はれる。廣野の中にある清水は、今の人の考へでは殆と發見する方法は無いやうであるが、この點にかけては未開の人民の方が、遙に優れた能力を持て居つた。山中でもウヂと稱して、猪鹿の開いた通路は、必ず清水から清水につながつて居る。例へば日の反射、風の速度もしくは最も微かなるせゝらぎの音の如き、野獸の感覺を刺戟するに足るべきものは、單純なる古代人もこれを悉く知

つて居たのであらう。

東北地方を旅行すると、此痕跡は今でも見ることが出來る。中古以前の田舍では、晝の休み場は勿論のこと、夜の宿にも必ずしも旅宿の便宜を得ることが出來なかつた。此の如き時代の驛次は常に清水の所在地であつたかと思はれる。

高清水とか宮清水とかいふ地名ある場所が、今では有名な邑落となるに至つた原因も亦これにあるらしいのである。武藏野の野中の清水の如きも、平原の面積に比べてその數は決して豐なりとはいはれぬ。中古七黨の武家がこの野の開發に努めて居た時代に、四方からこの野を横ぎつた道は、必ずしも最短距離の直線では無かつた筈である。夏の日盛りに慕ひ寄る大木の影、もしくは雨風をよけて晝餉をしたゝめ得た崖下の清水などは、常に彼等にとりては重要なる地點であつたらう。

自分等は地圖をひろげ、又は實地に望んで常に斯う思ふ。廣い野中に偶然出來たと思はれる十文字又は一續きの高臺の中で、特に選ばれたる登り道は、何か今の心理學ではまだ解らぬ人間的事情が、原因をなして居なければならぬ筈である。

而うして假にそれ等の地點に、今日出づる清水が無いとしても、元はあつたものと見ねば說明の出來ぬ四つ辻や坂元の多いことは、恰も以前には日影となるべき大木があつたと、見なければ說明の出來ぬ橋本の里と同じである。

川を隔てた二つの部落が交通を求めた場合ならば、渡し場橋場の成立ちもよく解るが、廣漠たる荒野の中の屈曲して出來た道、その道の行きどまりに二三個の茶店などで成立つて居る橋本の里は、一番初めは遠く望み得べき樹蔭を慕つて、近付いたものと見るより外は無い。

その樹蔭の水が流れでは無くて、湧き水であつた場合も事情は同じことで、南北から來る人と落ち合ふ處といへば、やはり此の如き「清水流るゝ柳かげ」であつたであらう。

斯ういふ想像から、自分は武藏野の多くの村にある鎭守の御手洗を、まだ家も無く田畑も無かつた昔から、既に現はれて居つたものと思つて居る。

昔の人は大膽でもあれば、又外的に迫られた事情もあつて、野宿も怖れず、妻子眷屬を引き具して、未だ試みざる川上の谷に村を造りに入り込んだ場合も無かつたとは申されぬが、普通考慮の結果の移住開拓ならば、必ず前以て二度三度の探檢は試みるであらうし、特にこの爲に視察には行かぬ迄も、往來の序に熟知したる場所を、選ぶべきは自然のことである。

而うして用水の問題が古人の生活にこれ程必要であつたとすれば、つまりは淸く豐なるを以て人に知られた淸水の處へ、辿りつくのが自然の歩みで、恐らくは多くの場合に神を奉じて淸水に趣くよりも、既にまします水の神に許されて、其下流を掬むといふことになつたであらう。

一二

此次には、人家の數と水との關係、新らしき水の發見、鑿井の術、横穴といふ順序に、叙述の歩を進めて見ようと思ふ。

自分が子供の頃知つて居る關東平原の二三の町では、道幅が街道の繩手路よりは倍も廣くて、その中央に二三町おきに一つづゝ、鑿り井戸の列をなしてゐるものを見た。今は勿論警察の命令に依つて埋められて居るが。道幅の廣いのは一つは日限市（ヒギリイチ）の痕跡でもあるがこの鑿り井戸の併列も亦これにあづかつて居る。

東京でも自分等は微に記憶して居る。一二の市街には道中の井戸があつた。例へば今電車の横切つて居る市ケ谷のヤキモチ坂下に在つた井戸などは名水であつた。普通のものよりも大形の井戸側の、周圍を駒寄せで圍つてあつたかと思ふ。

箇々の小農が屋敷の隅に一つづゝの井戸をひかへたのは、鑿泉の技術の餘程普及した近代以後の事であるらしい。その以前は右の如く共用の井戸の水を分配して居つたものである。

都會から田舍に來る旅行者が屢〻意外に思ふことは、燃料も豐かで人の手にもことかゝ

鑿り井戸

ぬ農村で、風呂の水の分量が甚だ尠ないことである。極端な例は昨日一昨日の風呂を沸し直して、白くなる迄つかふやうな水の儉約をするといふことは、新らしい市街生活に馴れた者の、殆と理由を見出すに苦しむ所であるが、やはり亦一つの泉で多數の家を支へた因習と見るの外はない。

道路の中央に井戸を掘つて置く習慣は、恐らくは町中に用水を引く慣習から出たものと思つて居る。而うしてこの慣習は更に遡つて、小さい流れを挟んで屋敷を割り當てた古い生活の名殘であらう。

五戸三戸の一類が集り住むならば、大川の岸にも好い地面はあるか知らぬが、何十戸もまとまつた農民が、一處に邑落を造るとなつては、無理無しに水害の危險を侵さずに、宅地を見たてることの困難な場合が多い。それで若干の勞力を費して溝を堀り水を引き、なるべく公平に之を使用させんとする爲には、右申すが如き町中の水路、又は鑿井を作ることになるものである。

此類の用水路は、或時代までは確に町の美觀であつた。家々の女房や娘が、家具を提げ道を横ぎつて川端に下つて行く趣は、古い淋しい町を晩方などに通りあはせた旅人の、永く忘る能はざる風情である。

普通洗場と稱して一段低く置いた平石又は踏板を、地方に依つてはカドとも呼んで居る。山陰では是を井ドバといふ。カドは卽ち川處で、必ずしも洗ひ場でなくとも、舟付き徒渉其他一線の川の內の、殊に生活に關係の深い地點に與へられた名である。

町中を流る〻小川のカドの邊りには、多くは柳、又は柳ならずとも涼しい木蔭があつて、夏の頃の旅には人でも馬でも、自然に流れに接して歩いて居る。これが又古い驛次の歌心を催したものである。

しかしながら或程度以上にその町が發達して、溝の小石に泥が付き、鹽魚の骨が滯つたり塵芥が流れたりするやうになる頃は、他の一方では必ず交通障碍といふ苦情が起る。そこで最近二十年三十年の間に、昔美しかつた町の小川の多くのものは、官命を以て埋めさ

せられたのである。

全體今いふ町の起原は、極めて簡略なものである。所謂戰國の時代に、僅かな丘陵の突端に住んで居る武家が、自分の保護すべき百姓をその丘の麓に住はせたのが始まりである。關東では根小屋とか寄居とかいふのがその普通の名稱である。根小屋寄居の多くは片側町で、便宜次第或は丘を背にして外に面し、或は道を隔てゝ丘の方に向つて建てた。これが所謂城下町の双葉である。

後者即ち道を隔てゝ丘に對して建てた町は片羽又は片原又は片平ともいつた。片羽に住む人民は、丘の麓を廻つて流るゝ水に寄つて生活した場合が多からうと思ふ。しかし砦の防備に故障の無い場合には、時としては丘の崖からしたゝり下つて來る泉を、汲んだ場合もあつたか知らぬが、斯う云ふ處では、水の不足が夙に城下の發達を妨げた。

その後世中が靜かになつて、武家の保障が無くとも安全に生活の出來るやうになつてから、少しづゝ丘の麓から遠ざかつて、成るべくは緩傾斜のある廣敞なる地を相して、町を移して行く傾向が出來た。これもやはり用水の關係が原で、斯ういふ地形で無いと百戸以上の人民に、常に清い水を供することが六つかしかつた爲である。

昔開けた道路には、屢〻僅かづゝの上り下りがあつて、如何にも人馬の足の疲を顧みなかつた樣に見えるが、その理由は必ずしも常に此の如しとはいはぬが、やゝ坂がゝつた處で無いと、驛次の宿場を創設又選定することが困難であつたからである。

然るに何物の發達にも行き止りがある如く、此の如くして一旦は便利であつた町の飲み水も、後には追々と不潔になつて、何分にも辛棒が出來ぬまでに町は發達して來た。

最近三十年間の町の歷史は、一方に於ては以前の一筋町が多くの横丁を持つて來て、町中の小川を邪魔ものにし、その埋立てを餘儀なくすると同時に、一方に於ては飲水の他の供給方法を見出さねばならぬ必要を生じた。各府縣の市街地で、今以て騷いで居る公設水道の問題は、つまりこの歷史の反影である。

それ故に早く大きくなつた東京の如きは、早くからこの問題を經驗して居る。最初の江

驛次の宿場

戸の城下に出來た小都會は、恐らくは神田明神の丘の清水とか、山王權現の御手洗の水の末などを掬むだけで足りたのであらう。

それが久しからずして五里と七里の遠方から、大土木を起して水道を引かねばならぬやうになつたのは、要するに創設者の豫期以上に人口が殖えたからである。

最近の例として自分の知つて居るのは相州の曾屋即ち今の秦野町の用水問題である。この邊は特色ある地形で、地下水の多い處である。曾屋權現の御手洗の水は非常に豐富なものであつたから社から東の方へかけてその流れに沿うて、一線の大きな町が出來て居た。

しかも氏子にしてこの水を用ゐぬ者は、神の意に反すといふ信仰があつて、人の數が水量に較べて餘程多くなり過ぎた後迄も、辛棒してこの水を飲んで居たものらしい。

當時の人心を察するに最も適切なる史料は、今から百年ばかり前に下流に住む人々が辛棒し兼ねて往々にして鑿り井戸を試みた頃に、ちようど激しい疫病がはやつた。それを氏子共は明神の御手洗の水を飲まぬ者が出來たから、この禍が現はれたと稱して、嚴重なる

謝罪の祭をして居る。

此土地などは丘の傾斜が急に過ぎるので、無用に流れ去る水が多かつたのであることを、近年になつて好く理解した人が出て來て、ごく簡單な設備を以て瀦水池を、明神の社の横手にこしらへて、清水の分配を調節した所が、その結果は甚だ良好で、僅な經費で盛んに増加し行く人口を支へることが出來た。

併しこれもやはり或時代迄を支へるに過ぎぬことであらうと思ふ。

是迄の人が町村の發達を計畫する上に、飲水の問題を輕視して居つたことはよくなかつた。流れ川もしくは露頭の泉にたよつた時代は勿論のこと、穿り井戸の技術が如何に進んだからといつても、用ゐる地下水の分量次第である。

その水量が許さぬ程度に迄、人口を殖さうとしたのは無謀であつた。町が既に大きくなつてしまへば、假令莫大な金錢を費しても遠方から水を引いて來るの外は無いが、さういふ骨折をさせねばならぬ時まで、吾々は豫め考ふべき問題を考へなかつたのである。

鑿り井戸の技術の發達普及は、横縦共に鑛山業の進歩と、著しい關係があるやうに思ふ。吾々の生活の最も重要なる條件は、久しい年月の間無名の技術者ばかりが考へてくれて居たのである。

最近は又著しく鑿井の技術が進歩したやうである。しかし土地の値が上つて、よほど其利用を巧みにせねばならぬ今日では、長距離の水道は追々と不可能になつて行くことゝ思ふ。

從つて是迄横に遠く手を伸して居つたものを、今後、底へ深く探り求めねばならぬことゝなるであらう。これが田尻博士などの地下水論の論旨であつたやうに私は思ふ。それもこれも結局する處では共同生活費の問題になるのである。

旅行の話　その二

――昭和二十二年一――

手帖といふ冊子が出ると聞いて、しきりに旅の話がして見たくなつた。自分の畫友で最もよくあるいて居るのは、京都と馴染の深い故川口孫治郎君である。この人のは、手帖とも言へない半紙本に、毛筆で達者に書いた日記が百數十卷もあつて、どんなに疲れた晩でも床に就く前に、必ず一時間は其日の見聞を書かずには寢ないといふ流義であつた。是が久留米の空襲で焚けたのではないかと案じて居るのだが、それは〳〵詳しい又正確な記錄で、鳥の話ばかりを此中から抜き出したものが日本鳥類生態資料、是だけでも菊版五六百頁の大冊であつた。まだ其外にも獸の生活や獵人の話等、一度は自分も見て置かなくてはと

思つて居たものが色々ある。是などはたしかに始めから、後の讀者を豫期した日記であつた。之に比べると、私の手帖なんかは物の數でない。旅行の部分が少しこまかいといふ位で、書いてあるのは宿屋の名、用も無い里數や時刻などで、たま〳〵話に來てくれた人の名を列記してあつても。話題さへ屢〻附け落して居る。あとで記憶を書き入れる氣で居ても、旅行後は用が溜つて居て特別に忙しいので、つい其まゝに取出さずにしまふことが多く、年をとつて閑が出來た頃には、もう忘れきつたことばかりである。二年前の空襲警報のさなかに、片づけ物をしようとして私は之を引張り出し、あんまりつまらぬので歎息しつゝ、大半は片づけてしまつた。さうして是でもう旅をしなかつたのと同じになつた、といふやうな寂しい思ひをしたことであつた。

○

しかし殘つて居たにしても、實はさう大したことではない。誰か目を留めて是は何だらうかと、いふやうな場合がすでにごく稀で、家ではたゞ少しばかり、消えるのにひまが掛るといふだけである。家から外へ散らばつて行く機會も、近年は段々多くなるらしく、東京の古書展などにも、時折は見かけるやうになつたが、それぱかりはあまり熱心な蒐集家も無い。大抵は字が拙なく本がよごれ、おまけに著者が無名なので、何としても襲藏に適しないからである。以前私が或雜誌に紹介した一青年の紀行なども、表紙に村の名と姓名が有るので、後にこの家の人だといふことまでは判つたが、家とも村とも關係の無い旅の手帖であり、反故にして出した位だから、もう再び之を鄉土の史料に、使つて見ようといふ者も無かつた。村に靜かに一生を終つた人々が、死ぬまでのうちに一ぺんか二度、よほどの因緣が熟して思ひ立つた旅なのだから、當の本人にとつての大事件であるは勿論、それを數多く積み貯へ且つ綜合し調和したものが、やがては今日の文化を構成して居るわけであるが、記錄として集めて置からといふことは企てた人も無く、又もう其時期も過ぎて居るのである。

○

るものにした代りに、以前は多忙といつて旅をしなかつた者が、今ではどし〳〵とこの仲間に入つて來て、ひたすら行く先だけを問題にするやうになつてしまつたのである。旅といふもの〻本質は、いつの間にか一變して居る。閉だからよく旅をする、など〻いふことが考へられなくなつた。

ぼけあざみ旅して見たく野はなりぬ　山店

斯ういふ旅人と折々出逢つたのも、私等の頃までのことであつた。諸國の往還は今もちやんと有るが、それを使ふのは近村の者だけで、茶屋も旅籠屋も無く、峠路は芒である。汽車が有る限り、大まはりしても、それに乘つて行かぬとみんなから不審をかけられる。つまりは旅とあるくといふこと〻が、丸つきり別々の仕事になつて居るのである。

○

古來の路筋は榮枯盛衰した。中でも僅かなものだけが途法もなく重要になり、其他は土地の者にまで由緒がわからなくなつて來た。東京などで發見せられる近世の道中記は、幾つあつても大抵は東海道五十三次、稀には金比羅宮島錦帶橋まで足を伸ばし、歸りは中仙道をや〻草臥れて戻つて來るといふ、型にはまつたものばかりであつて、是を百ほども集めて重ね合せて見たら、何か思ひかけない事實が見付かるのかも知れぬが、そんな暇人はもう是からは出さうも無い。それよりも困つたことは雲助でも、大よそ旅と名のつくもの〻知識は、全部がこの方面だけの經驗によつて居るので、程なく單調にも平凡にもなつてしまひ、汽車が出來ればもう之を省みる者は無いのである。日本は旅行の殊に盛んな國だつたと思はれるのだが、その影響の跡づけ得られるものが、斯んなに乏しいのもちよつと異數である。しかも文化の隱れたる交流を想像しないと、說明の出來ない現象は、今でも無數に心付かれるのである。

をかしい言ひ方だが、私は斯う考へて居る。一つも手帖を附けなかつた幾十萬の旅人の、過去千年の間に爲し遂げた事業も、結局は今僅かに殘つて居る小數者の紀行から、こ〻を道の口として追々に尋ねて行かれる。無論その以外にも方法はあり、たとへば古道の今あ

或は單純なる個々の讀み物として、紙や活字がもう少し自由になつてから、斯ういふものを出來るだけ數多く、竝べ列ねて出して置かうといふ時代が來るのかとも思ふが、保存が果して間に合ふかどうかが心もと無く、其上に古い手跡の讀めなくなることは、我々昔者が驚くほどの速度である。是では僅かに殘つて居る部分までが、すつかり蟲に閉ぢられて開かなくなるにきまつて居る。時節を待つといふやうなことは言つて居られない。それ故に今からでも旅行の話をはやらせて、さういふ機運を促進する必要があるかと思ふ。私なんかの手帖は貧弱なもので、假に保存してあつても役には立ちさうも無いが、それでも今になつて回顧して見ると、ちようど自分たちの壯年の頃が、我邦の旅行道の最盛期であつて、それが漸次に衰頽したことを、まのあたりに見聞して來て居るのみで無く、遠い昔の世の行脚の人たちの、難行苦業が積り重なつて、終にこの様な花咲く春にめぐり逢つたのだといふことも、まだ我々だけは意識して居るのである。是が將來果して今一度、再び日本人の若い日を樂しませるだらうか、はた又永遠にそれは過去の悦びとなつてしまふか。

國の歩みの是が大切な岐れ路であつて、うつかり豫言じみたことも言はれないけれど、大體に兵役といふものが全く無くなつて、若い人々はそれだけ時間が多くなつて居る。學校や講演書籍以外に、身の爲世の爲に費し得る力がまだよほど彼等には有るものと見ることが出來る。少くとも一部はこの方面に向つてそれが利用せられることにならうかと私は樂觀して居る。さういふ傾向がもし幸ひに現はれて來るものならば、默つてたゞ見て居ることは何分にも義理が悪いのである。

○

衰微といつては或は承知をせぬ人もあらうが、ともかくも旅行道は近年になつて變化し、以前あつたもの〳〵幾つかゞ無くなつて居る。最も著しい一つは路筋の選び方の狹くなつたこと、或は旅の目的の固定と謂つてもよからうか。家を出る時から行く先がちやんと定まり、そこの用事がすめば直ぐに家路に向ひ、路はめつたに迂回せず、途中に有る物には一向に目をくれない。是は固より交通の便利になつた爲で、旅を手輕に何度でも思ひ立たれ

るものにした代りに、以前は多忙といつて旅をしなかつた者が、今ではどし〳〵とこの仲間に入つて來て、ひたすら行く先だけを問題にするやうになつてしまつたのである。

旅といふもの〻本質は、いつの間にか一變して居る。閑だからよく旅をする、などゝいふことが考へられなくなつた。

ぼけあざみ旅して見たく野はなりぬ　山店

斯ういふ旅人と折々出逢つたのも、私等の頃までのことであつた。諸國の往還は今もちやんと有るが、それを使ふのは近村の者だけで、茶屋も旅籠屋も無く、峠路は芒である。汽車が有る限り、大まはりしても、それに乘つて行かぬとみんなから不審をかけられる。つまりは旅とあるくといふこと〻が、丸つきり別々の仕事になつて居るのである。

○

古來の路筋は榮枯盛衰した。中でも僅かなものだけが途法もなく重要になり、其他は土地の者にまで由緒がわからなくなつて來た。東京などで發見せられる近世の道中記は、幾つあつても大抵は東海道五十三次、稀には金比羅宮島錦帶橋まで足を伸ばし、歸りは中仙道をやゝ草臥れて戻つて來るといふ、型にはまつたものばかりであつて、是を百ほども集めて重ね合せて見たら、何か思ひかけない事實が見付かるのかも知れぬが、そんな暇人はもう是からは出さうも無い。それよりも困つたことは雲助でも出女でも、大よそ旅と名のつくものゝ知識は、全部がこの方面だけの經驗によつて居るので、程なく單調にも平凡にもなつてしまひ、汽車が出來ればもう之を省みる者は無いのである。日本は旅行の殊に盛んな國だつたと思はれるのだが、その影響の跡づけ得られるものが、斯んなに乏しいのもちよつと異數である。しかも文化の隱れたる交流を想像しないと、說明の出來ない現象は、今でも無數に心付かれるのである。

をかしい言ひ方だが、私は斯う考へて居る。一つも手帖を附けなかつた幾十萬の旅人の、過去千年の間に爲し遂げた事業も、結局は今僅かに殘つて居る小數者の紀行から、こゝを道の口として追々に尋ねて行かれる。無論その以外にも方法はあり、たとへば古道の今あ

る形態、之に關する土地人の記憶、又一方にはそこを通つて、入つて來たらうと思はるゝ
もの〳〵比較、たとへば方言とか流行唄とか昔話とか、乃至は稻荷や鍬神といふやうな信仰
の一致などから、逆にそれを運んだ人々の面ざしを、考へて見ることも出來るだらうが、
さういふ興味をかき立てる爲にも、やはり先づ旅といふもの〳〵大いに變遷し、かつては今
よりも遙かに充實した、効果の永き世に遺るものであつたことを、心付かせる必要はあつ
たのである。

○

たゞ殘念な話は、私が斯ういふ考へを持ち出したのは、少しばかり時が遲かつた。以前
も紀行文集を編纂して見たり、五萬分一の測量部地圖を左に置いて、色鉛筆で線を引きつ
つ、興味深く讀んだものも幾つかあるのだが、まだ其時には自分たちが口を出さなければ、
旅がこんなにも棄てぼかしに、忘れられて行くものとまでは思はなかつた。今から始めて
ももう纏まる見込は無いが、それでもこの事が可かり樂しみの多い、行く〳〵新らしい物
の見方を、引出す絲口としては役に立つといふことを、說き立てる位はやつて置きたい。
さうしてあはよくばもう一度、明治時代のやうな活氣に充ちた若い旅人の、全國を跋涉す
る世の中を再現させたいのである。

紀行の今までに公表せられて居るものは、大部分は詩歌俳諧の保存を主とした、記述の
分子の少ないものばかりで、あの川口君の鳥類觀察の旅の記の如きものは、以前は殊に稀
であつた。他の多くは最初から家に留め、子孫の閱讀をさへ豫期しなかつたものなのだか
ら、捜さなければ見付からぬのは當り前の話である。それでも大切に保管しようといふ者
の有るうちはよかつたが、今度はどうやらそれも惜しくなつた。何か第二の手段を講じな
ければならぬ機會である。戰中に私は山科言繼卿の日記を讀んで居て、あの中に幾つもの
得がたい旅の記事のあるのを見て感動した。その一つは岐阜へ信長に逢ひに行つた有名な
ものだが、なほその以外にも若い頃に、陸路近江の千種だか八風だかの峠を越えて、清須
へ遊びに行つた往復の道の記と、年をとつて後駿府の今川家へ、叔母さんを訪ねて世話に

なりに行つた際の日記などが、平凡な常の京都の記録の中に、挿まつて光を放つて居る。さうしてもう此時代の村里の生活を描いた文献などは、捜しても他にはさう得られさうも無いのである。一つ二つではたゞ珍奇といふに過ぎぬだらうが、もしも斯ういふ風な人と家、旅の前後の世相といふものを取添へて、しかも同じ方面同じ路線の、五十年百年を隔てた姿を、たとへあら〳〵とでも書き残したものが集まつて來ると、新たに考へられることが必ず多いこと〳〵思ふ。最近に私が京都の諸君に勧めて、諸國の舊家などに持傳へた先代の日記を、次々に整理して出してもらはうとして居るのも、一つには又その平和單調の記錄の間から、いはゆる生涯の思ひ出であつたらうと思ふ時々の印象を、特に際立たせて味はつて見たいからであつた。寂寞たる常の日の沈滯に裏附けられて、事件が我々の心意に及ぼす効果の大きかつたことは、都市の現代にはもう想像し難くなつて居る。祭や人間の離合集散の如き、他にもくさ〳〵の機會はあつたけれども、さういふ中でも旅は殊に其昂奮の跡をわかりやすくして居る。言はゞ野中の鮮かなる「ほけあざみ」の花であつた。

○

隱岐の燒火山の歷代祠官、松浦氏といふ舊家に持傳へた二つの手帖を、近頃測らずも見せてもらつて、改めて自分の小さな旅が、如何なる因緣を百年後の日本と、結び得るであらうかを考へる機會にぶつかつた。この日記のみは何としても讀み物では無い。是が子孫の手に大切に管理せられ、しかも國內の相互交通が、もう一度考へなほされねばならぬ時世になつて、現はれ出たといふことは偶然の幸福である。何よりもなつかしいと思ふのはこの二つの手帖が、島に住む人の旅であつただけに、共に私などの通つて見ようとも企てなかつた路筋をとつて居ることで、一方の覺心といふ人の日記は、善光寺を經て江戸へ出て行くのに、便船を見つけて先づ佐渡島に渡り、そこで十數日の風待ちをして後に、新潟から上陸して海岸傳ひの路をあるいて居る。稀なる順風で、能登の輪島に一夜の船繫りをしたばかりで、四日目にはもう佐渡の太田の湊に著いたとある。燒火山は船方の尊信する神であつた故に、船頭

甚六が家では勿論心の限りの歓待を受け、處々の島内の靈場にも巡詣して居る。ちようど桃櫻の到る處に咲き出した、舊暦二月の末方のことであつた。

それから他の一方の快榮といふ人の旅は、伊勢參りが主であつて、還りには奈良と京都とを見物して居る。京と伊勢との間は大體に普通の途らしいが、其他の往復には自分などの考へても見なかつた路筋を通つて居る。地名は一つ一つ竝べて見るのもせんが無いが、まづ美保ノ關に上陸して次の日は安來泊り、それから赤松越をして大山に詣で、今の因備線の根雨に下つて居る。それから三鴨勝山坪井等、ずつと作州を横に切つて播州の三ケ月から姫路に出るまで、途中滞在もあつて其間に八日を費して居る。何か縁故があつて此路を擇んだのかも知れぬが、ともかくも途中には宿屋があり中食の茶屋もあつて、是も堂々たる街道であつた。歸路の丹波街道は私がまだ通つたことのないだけで、是は京都の人にはなじみの深いものであつたらう。日程は須知・福知山・河守・宮津、それから橋立見物をして翌日は久美濱泊り、城崎温泉に四日の湯治の後、その近くのキリハマといふ地から舟を雇ひ、モロイソといふ處に上陸したとあるが、この二つの地名は私には始めてである。外に書いてあるのは宿屋の名と著發の時刻、宿料買物代ぐらゐのもので、それも矢立の墨のかすれ書きで、單なる小遣帳の筆ついでのやうなものだが、子孫後裔はもとよりのこと、我々にとつても是だけのものが、有ると無いとでは大きなちがひである。言葉の外のものを味はふと否とは、見る人によつてさまざまでもあらうが、たつた是ばかりの文字の面からでも、たとへば近畿一帯の宿屋は皆木賃で、毎月白米を買ふその代金が、土地毎に大分ちがつて居ることか、又は京で調へる買物の種類とか、それを配分するそれ〴〵の心遣ひとか、時代の片端に觸れたものが色々ある。一つや二つの例ではたゞの珍奇

諸磯は因幡の賀露あたりのことではないか、とにかくに爰で隱岐への便船を待つて居て、乘船して三日目に、隱岐島後の西郷に歸着したことになつて居る。

○

さつと先づ是だけの事がわかるのだから、相應に綿密な日記かといふとそれは大ちがひである。外に書いてあるのは宿屋の名と著發の時刻、宿料買物代ぐらゐのもので、それも矢立の墨のかすれ書きで、單なる小遣帳の筆ついでのやうなものだが、子孫後裔はもとよりのこと、我々にとつても是だけのものが、有ると無いとでは大きなちがひである。言葉の外のものを味はふと否とは、見る人によつてさまざまでもあらうが、たつた是ばかりの文字の面からでも、たとへば近畿一帯の宿屋は皆木賃で、毎月白米を買ふその代金が、土地毎に大分ちがつて居ることか、又は京で調へる買物の種類とか、それを配分するそれ〴〵の心遣ひとか、時代の片端に觸れたものが色々ある。一つや二つの例ではたゞの珍奇

に留まるだらうが、もしも誰かの心がけによつて、斯ういふ種類の記錄が國の隅々、多くの時處に亘つて集まつて來るやうになれば、我々の興味は雪ころばしであらうと思ふ。

宿屋といふ問題についても心付いたことはあるのだが、段々長くなつたから此あたりで一旦切上げる。最初の計畫は足ごしらへといふことの變遷を、自分などの經驗によつて話して見ようといふのであつたが、それも亦いつか詳しく語ることにして今は略して置かう。のんきに自由に話を進めようとすると、書くことまでが漫遊式になつていけない。紙の大切なけふ此頃、果して斯ういふものでも記事にしてよいのかどうか。編輯子の取捨に御任せ申すより他は無い。

索引

ア

赤鱆（あかえひ）　一一九
アガリ　二一六
秋蠶　九四
麻布　一九六
アスナラウ　九〇
アスヒ　五九
壓搾機　一〇
穴のあいた小石　二二〇
蛇（あぶ）　一九一
アフギ　一九〇
油桐（あぶらぎり）　一一〇、一三五、二〇一
海士町　一〇三
網の染料　七九
洗場　二七九
行脚僧　二二七、二三二
暗渠　一〇八
按摩　二三三

イ

いかき 二一五
「伊賀拾遺」 二三五
筏（イカダ） 二三四
池見躑躅 二一一
石垣を積む術 二四三
石切場 一六四
石工 一九九
石黒忠悳翁 一三
石地藏 二〇一、二〇二、二一二
石棒 二〇三
石屋 二三五
移住開拓 二七六
伊勢萬歳 二三六
伊勢參り 二九六
イタギ 一三五
板葺き 四、七〇
板屋 八一
一丸 二〇八
一向宗（いっこうしゅう） 八八
一間元（けんもと） 一九一
泉鏡花氏 七三
泉の神 二七三
泉と神社 二七二
稻荷 二九二
稻藁（いなわら） 二六一、二六二
稻扱器（いねこき） 一三三
岩ツツジ 一九三
イモチ病 九六

ウ

入會 二九、一四六、一五七、二一五
入會權 二三四
入會山 二五二、二五三
入石（いりいし）の弊 一五三
入野 一四八
陰翳樹除去 七四
隱居 七一
飲料水の供給 二六七

ウ

兎の防ぎ 二一二
牛 二八、三〇、七四、一一三
ウヂ 二七三
氏子 二八二
卯月八日 五七
鰻 一五四
馬 二三四
馬と鷲 二五二、二五三
海添 一五三
埋立事業 一四八
埋立新田 七四
裏作 七一
漆掻き 二六七
漆掻鎌 一四、七七、九六
漆の木 一二六
ウルヒ 一二七
三〇
五八

エ

永小作權者 一五二、
英語讀本 一一三

枝打 二一九
江戸の旅行者 二三三
煙害地 二〇四
燕麥 七七

オ

オイ 七一
狼(おかみ)のかしら 二〇〇
オゲ 一八〇、二一五
御師 一八九
押賣り 二三〇
御立山 八四
織田瓶 一一六
オニギ 一八二
鬼甚九郎 一八九
鬼つつじ 五三
大鋸(おほが) 五八、一二一
大迹王子(おほとのわうじ) 一二四、一九九
大敷網 七九
卸山(おろしやま) 一二九
隱田 一〇八

カ・ガ

カ(蚊) 一九一
開墾 二四六
戒壇廻り 二一一
垣内(かいち) 一九六
害蟲の標本 一二三
カイツ 一九〇
カイトヤマ(垣内山) 一三一

開發名主 二八
「耕作早指南」 一九九
講習會 三
楮 一七六、一九五、二〇三、二〇八
耕地整理 一九、二一、二四、九六、一〇〇、一六四、一六六
耕馬 八〇
幸若 一一六
案山子(かゞし) 二一二
加賀帽子 三三
角あみ 七九
覺心 二九五
角兵衛獅子 一八
かくま石 二〇二
籠細工 二〇〇
かし鳥 五九
片羽 二八〇
片破風造り 一一四
片原 二八〇
片平 二八〇
鍛冶屋 八六
カチン 一四二
カド 二七九
カナギ 一九二
河上肇博士 一七三、二一八
川添 二四五
川船汽船 一六
カハヤ 二〇〇
川漁 一九八
カビ 一九一、二四一
竈 二六四

蒲脛巾（はばき） 二〇九
紙漉き 二〇三
龜 二二五
鴨の坂網猟 二〇〇
蚊帳 一二七
茅山 一九七
カラ澤 二六八
刈敷 三五、三五四
刈分け 六六
カルサン 一四、一九六、二〇一
カンコ踊 一九七
韓人の末 二三四
神戸正雄博士 一七三

キ・ギ

厩舎 二六三
牛車 三三〇、三三一
厩肥 一〇四、二〇八
寄寓者の村税 四
木地屋 一八〇
木賃 一九七
木流し 二〇七
絹織物 九四
共有山 一四七
共有地 一四六、一三四
共有林 一四五
經木眞田（きょうぎさなだ） 八三
共進會 二〇一
共同生活費の問題 二八四
漁業調査書 一五一

漁商人 一五四
漁民の薪 二五七
桐 一〇四
杞柳 一六五
金太郎鰻 一五六
銀杏 一三五
金肥 三〇八、三五四

ク・グ

區有財産 一三〇
クサマキ（臭槙） 五九、八九
棟を留める 一九六
棟を留める棒 二〇五
葛布 八一
クヅヤ 一九二

屑綿 二三一
鍬神 二九二
鍬先 六八
熊 六三、二三三
雲助 二九一
黒モジ 二三〇
桑 一〇七
快榮 二九六
鑛山業の進歩 二八四
鑛毒問題 三九
鑛夫 二〇四、二〇五、二一〇
桑木嚴翼博士 二一八
火葬場 一〇七
果樹園 一三三
官有地 一〇五

官行伐木 二二

ケ・ゲ

鷄糞 三三
鷄卵 三三
下駄 二一一
下駄の歯 八六
夾竹桃 二六九
毛桃 三三
玄武岩 二四

コ・ゴ

洪水 三三七
公設水道 二八一
購買組合 四四

虹梁 二三
肥曳き 六
國有林 九、一〇七、一二三、一二六、一三一、一三九、
虚空藏 四六
コクソ 二〇八
御供田 二四
國内移動 二六六
國分寺 一五五
小作組合 二六
小作人 二五九
小作料 一六、一三三、二〇八
腰掛石 三三
乞食 二一〇
乞食名 二二七
五十町一里 二四一

鑑種 七五
小遣帳 二九七
五德（鎖輪） 二一三
粉糠 八七
五分サイタ 五九
古墳 二六一
小村 二四六
子安地藏 二〇一
御料林 六〇
コロ 二五六、二五八
コロ木 二一〇
コロモガヤ 二一三
混合した人種 二六六
ゴンボダネ 一八三

サ・ザ

サイタ 五九
裁縫職人 二一九
材木商 二五七
造林の伎倆 二六七
造林事業 一四三
桑園 九四
境に塚を築く 二三三
坂元 二七五
鑿井の術 二四三、二七二、二七六、
下戻法 一三〇
サコシ 一三五
サコンタラウ 二四三
ササメ 八七
さゝら 二二五

ササラ　二二五
指物屋　九二
サツクリ　一九六
薩摩薯　七三
薩摩琵琶　二〇二
サネカヅラ　一九〇
鯖　一五四
鯖鳥　一五七
鯖漁　一〇二
サンカ　一七八、一八〇、一八五、一九八、二一五、二一六
山岳會　一一三
産業組合　六、一九九
三莊太夫　一五〇
三反田　二四
三德　一四一

山民の食物　五七

シ・ジ

試驗場　一〇、七七
下刈　二一九
漆器　八、一一四、一三五、一三六
シデノ木　一一四
自轉車　一一四
シナ　八六
試農場　一三三
柴　二一九、二二一
椎蕈　一九五
紙布　二〇一
鹽　三
シホウガラミ　一九二

鹽釜の燃料　二五七
鹽木　二五七
城下町　二八〇
莊内麩　三四
商人地主　二五六
商人地主禁止　二五五
社會組織の特質　二六七
謝罪の祭　二八三
蛇目傘　一七六
夙(シユク)の者　二三五
種苗　一九五
樹苗圃　一〇〇
撞木杖　六八
樹木の成長率　二五四
ジョウブロ　二〇〇

「諸國郡鄕考」　七
シラタ　八二
白瀧姫　二七〇
ジリョウジ　二一五
蜃氣樓　七九
人口過剩　二六七
人造肥料　七八、九七、二五四
神社合祀　二一一
眞宗寺　二一一
新村を興立　二五〇
新田　一〇
新田場　二四五
信用組合　四一
親鸞上人　二一七
人力車夫　二三三

森林法 一四三

ス・ズ

杉菜 二
杉苗 三
杉丸太 三
すつぽん 二六
スノコ 七
ズバイ 二〇
炭竈 八
炭燒地 一三
水害豫防組合 一三
水產講習所 一五
水產學校 一三
水車 二四
水神の奇蹟 二七〇
水腐地 一九
水蜜桃 一七〇
水利問題 二五
スヱジロ 二一二、

セ・ゼ

制裁 一七
小學校教員 三三〇
石灰 九七、九九、一一二
石灰山 二〇三
石灰燒き 八六
石棺 一三一
關所 一四〇
世間話 三三七

錢屋五兵衞 一〇一
セブリ 二五、二六、二七
背割 二三三
善根宿 二六、二七
千社札 二三八
先代の日記 二九四
仙桃酒 一三
膳の木地 五三

ソ・ゾ

蕎麥粉 一九四
ソロバン石 三八
「存採叢書」 二三
大家族 七一
大師詣り 九八、一九六、二六一
大豆 一九五
臺所 二九
堆肥 一二三
大福帳 一七七
大謀網 七四
陶器 三三
「塘叢」 二一
黨人の桔杭 一九〇
道祖石像 五五
道場 九二、一〇八、一四五
道中記
田うなひ
盜伐

タ・ダ

田植　二六
田植祭　一五八
タエテといふ副詞　六一
高桑作り　三〇
高清水　二七四
高窓　七一
瀧神　一八九
薪の市價　二五七
薪山　六七、二五五
薪を流す風習　二五九
燒火山（たくひさん）　二五五
拷衾（タクブスマ）　二四九
武田耕雲齋　二一二
「但馬考」　一一〇、一六二
田島錦治博士　三三
タダコエ　一九二
疊　二〇五、二六二
ダナ　一九〇
竪井戸　二五二
棚田　一三八
谷入　二四五
足袋　二四九、二五七
旅商人　二三八
旅の手帳　八〇
鯛引網　二五九
田舟　三三
タモ　七九
鱈釣り　六三
ダラニスケ　三三
鱈のカギ　三一二
樽丸　八九
垂れ蓆　七一
「檀鴿」　一七七
段木（ダン木）　二一四、二一三

チ

地價　一九四
地下水　二八二
地下水の出沒　二七〇
地下水の露頭　二六九
地下水論　二八四
地形語　五九
地上權　二〇四
地租改正　一九四
窒素石灰　七七
地主小作關係　二五五
地引網　三七
町家　二三八
帳紙　二〇七、二〇八
長者屋敷　一八九
帳面紙　一九五
茶畠　一四
中齒の足駄　二三九
中門口　二一三
楮の黒皮　二〇七
瀦水池　二八三
地理上の條件　二四

ツ

堆朱　三〇

通婚 二〇〇
ツギ八草鞋 三五
ツツガ 二五
栗花落(ツユリ) 二七〇
鶴 一六七
「敦賀名所記」 一三二

テ・デ

朝鮮の占鐘 一三三
出稼ぎ 一九五、二〇四、二〇五、二一〇
出作り 六九
テテ 一八一
手間 二五〇
出村 二五五
出女 二九一

ト・ド

天狗 一五九、一八七
テンゴ 一八七
テント 二一七
テンバ 一八六
テンボ 一八六
砥石 二一〇
東海道五十三次 二九一
土方の親分 二三〇
土器石器 一六一
特殊部落 一六六、二三〇、二三四、二三五
特賣法 九〇
年不取川 二六九
戸田海市博士 二三一

鳶口 一一一
飛地 二〇一
遠干潟 二五五
ドロ虫 八一

ナ

内陣 六七
内藤湖南博士 二一八
仲仕 一〇三
流木 八七、二五七
薙畑 六五、六六、六七、六九
夏着 一九六
縄 三五
縄手路 二七七
ナベザ 二一一

生駄(なまだ) 二三三
生の食物 二六三
ナル 一八四

ニ

苦水(ニガミヅ) 二六九
逃水 二六九
ニヅエンボ 六九
二宮徳氏 一七五
荷馬車曳き 二〇〇
新村出博士 二一八
鳰鳥 一一〇
二毛作 一四、七七、九四
荷持ちの人足 二三四
女僧 八八

ヌ

ヌタ

ネ

根小屋
鼠甲斐絹
ネソ
ネヅコ
ネム(合歡)
燃料
燃料の問題

ノ

ノアヒ
農學校
農具
能藝
「農業家訓」
農事講習
「農人嚢」
野方(ノガタ)の在所
野宿
野中の清水
飲水の問題

ハ・バ・パ

俳諧法師
方言
紡績

二八〇
二三九
二三〇
二三四
二三五
二三六
二三七
二三八
二三九
二四〇
二四一
二四二
二四三
二四四
二四五
二四六
二四七
二四八
二四九
二五〇
二五一
二五二
二五三
二五四
二五五
二五六
二五七
二五八
二五九
二六〇
二六一
二六二
二六三
二六四
二六五
二六六
二六七
二六八
二六九
二七〇
二七一
二七二
二七三
二七四
二七五
二七六
二七七
二七八
二七九
二八〇
二八一
二八二
二八三
二八四
二八五
二八六
二八七
二八八
二八九
二九〇
二九一
二九二
二九三
二九四
二九五
二九六
二九七
二九八
二九九
三〇〇
三〇一
三〇二
三〇三
三〇四
三〇五
三〇六
三〇七
三〇八
三〇九
三一〇
三一一
三一二
三一三
三一四
三一五
三一六
三一七
三一八
三一九
三二〇
三二一
三二二
三二三
三二四
三二五
三二六
三二七
三二八
三二九
三三〇
三三一
三三二
三三三
三三四
三三五
三三六
三三七
三三八
三三九
三四〇
三四一
三四二
三四三
三四四
三四五
三四六
三四七
三四八
三四九
三五〇
三五一
三五二
三五三
三五四
三五五
三五六
三五七
三五八
三五九
三六〇
三六一
三六二
三六三
三六四
三六五
三六六
三六七
三六八
三六九
三七〇
三七一
三七二
三七三
三七四
三七五
三七六
三七七
三七八
三七九
三八〇
三八一
三八二
三八三
三八四
三八五
三八六
三八七
三八八
三八九
三九〇
三九一
三九二
三九三
三九四
三九五
三九六
三九七
三九八
三九九
四〇〇
四〇一
四〇二
四〇三
四〇四
四〇五
四〇六
四〇七
四〇八
四〇九
四一〇
四一一
四一二
四一三
四一四
四一五
四一六
四一七
四一八
四一九
四二〇
四二一
四二二
四二三
四二四
四二五
四二六
四二七
四二八
四二九
四三〇
四三一
四三二
四三三
四三四
四三五
四三六
四三七
四三八
四三九
四四〇
四四一
四四二
四四三
四四四
四四五
四四六
四四七
四四八
四四九
四五〇
四五一
四五二
四五三
四五四
四五五
四五六
四五七
四五八
四五九
四六〇
四六一
四六二
四六三
四六四
四六五
四六六
四六七
四六八
四六九
四七〇
四七一
四七二
四七三
四七四
四七五
四七六
四七七
四七八
四七九
四八〇
四八一
四八二
四八三
四八四
四八五
四八六
四八七
四八八
四八九
四九〇
四九一
四九二
四九三
四九四
四九五
四九六
四九七
四九八
四九九
五〇〇
五〇一
五〇二
五〇三
五〇四
五〇五
五〇六
五〇七
五〇八
五〇九
五一〇
五一一
五一二
五一三
五一四
五一五
五一六
五一七
五一八
五一九
五二〇
五二一
五二二
五二三
五二四
五二五
五二六
五二七
五二八
五二九
五三〇
五三一
五三二
五三三
五三四
五三五
五三六
五三七
五三八
五三九
五四〇
五四一
五四二
五四三
五四四
五四五
五四六
五四七
五四八
五四九
五五〇
五五一
五五二
五五三
五五四
五五五
五五六
五五七
五五八
五五九
五六〇
五六一
五六二
五六三
五六四
五六五
五六六
五六七
五六八
五六九
五七〇
五七一
五七二
五七三
五七四
五七五
五七六
五七七
五七八
五七九
五八〇
五八一
五八二
五八三
五八四
五八五
五八六
五八七
五八八
五八九
五九〇
五九一
五九二
五九三
五九四
五九五
五九六
五九七
五九八
五九九
六〇〇
六〇一
六〇二
六〇三
六〇四
六〇五
六〇六
六〇七
六〇八
六〇九
六一〇
六一一
六一二
六一三
六一四
六一五
六一六
六一七
六一八
六一九
六二〇
六二一
六二二
六二三
六二四
六二五
六二六
六二七
六二八
六二九
六三〇
六三一
六三二
六三三
六三四
六三五
六三六
六三七
六三八
六三九
六四〇
六四一
六四二
六四三
六四四
六四五
六四六
六四七
六四八
六四九
六五〇
六五一
六五二
六五三
六五四
六五五
六五六
六五七
六五八
六五九
六六〇
六六一
六六二
六六三
六六四
六六五
六六六
六六七
六六八
六六九
六七〇
六七一
六七二
六七三
六七四
六七五
六七六
六七七
六七八
六七九
六八〇
六八一
六八二
六八三
六八四
六八五
六八六
六八七
六八八
六八九
六九〇
六九一
六九二
六九三
六九四
六九五
六九六
六九七
六九八
六九九
七〇〇
七〇一
七〇二
七〇三
七〇四
七〇五
七〇六
七〇七
七〇八
七〇九
七一〇
七一一
七一二
七一三
七一四
七一五
七一六
七一七
七一八
七一九
七二〇
七二一
七二二
七二三
七二四
七二五
七二六
七二七
七二八
七二九
七三〇
七三一
七三二
七三三
七三四
七三五
七三六
七三七
七三八
七三九
七四〇
七四一
七四二
七四三
七四四
七四五
七四六
七四七
七四八
七四九
七五〇
七五一
七五二
七五三
七五四
七五五
七五六
七五七
七五八
七五九
七六〇
七六一
七六二
七六三
七六四
七六五
七六六
七六七
七六八
七六九
七七〇
七七一
七七二
七七三
七七四
七七五
七七六
七七七
七七八
七七九
七八〇
七八一
七八二
七八三
七八四
七八五
七八六
七八七
七八八
七八九
七九〇
七九一
七九二
七九三
七九四
七九五
七九六
七九七
七九八
七九九
八〇〇
八〇一
八〇二
八〇三
八〇四
八〇五
八〇六
八〇七
八〇八
八〇九
八一〇
八一一
八一二
八一三
八一四
八一五
八一六
八一七
八一八
八一九
八二〇
八二一
八二二
八二三
八二四
八二五
八二六
八二七
八二八
八二九
八三〇
八三一
八三二
八三三
八三四
八三五
八三六
八三七
八三八
八三九
八四〇
八四一
八四二
八四三
八四四
八四五
八四六
八四七
八四八
八四九
八五〇
八五一
八五二
八五三
八五四
八五五
八五六
八五七
八五八
八五九
八六〇
八六一
八六二
八六三
八六四
八六五
八六六
八六七
八六八
八六九
八七〇
八七一
八七二
八七三
八七四
八七五
八七六
八七七
八七八
八七九
八八〇
八八一
八八二
八八三
八八四
八八五
八八六
八八七
八八八
八八九
八九〇
八九一
八九二
八九三
八九四
八九五
八九六
八九七
八九八
八九九
九〇〇
九〇一
九〇二
九〇三
九〇四
九〇五
九〇六
九〇七
九〇八
九〇九
九一〇
九一一
九一二
九一三
九一四
九一五
九一六
九一七
九一八
九一九
九二〇
九二一
九二二
九二三
九二四
九二五
九二六
九二七
九二八
九二九
九三〇
九三一
九三二
九三三
九三四
九三五
九三六
九三七
九三八
九三九
九四〇
九四一
九四二
九四三
九四四
九四五
九四六
九四七
九四八
九四九
九五〇
九五一
九五二
九五三
九五四
九五五
九五六
九五七
九五八
九五九
九六〇
九六一
九六二
九六三
九六四
九六五
九六六
九六七
九六八
九六九
九七〇
九七一
九七二
九七三
九七四
九七五
九七六
九七七
九七八
九七九
九八〇
九八一
九八二
九八三
九八四
九八五
九八六
九八七
九八八
九八九
九九〇
九九一
九九二
九九三
九九四
九九五
九九六
九九七
九九八
九九九
一〇〇〇
一〇〇一
一〇〇二
一〇〇三
一〇〇四
一〇〇五
一〇〇六
一〇〇七
一〇〇八
一〇〇九
一〇一〇
一〇一一
一〇一二
一〇一三
一〇一四
一〇一五
一〇一六
一〇一七
一〇一八
一〇一九
一〇二〇
一〇二一
一〇二二
一〇二三
一〇二四
一〇二五
一〇二六
一〇二七
一〇二八
一〇二九
一〇三〇
一〇三一
一〇三二
一〇三三
一〇三四
一〇三五
一〇三六
一〇三七
一〇三八
一〇三九
一〇四〇
一〇四一
一〇四二
一〇四三
一〇四四
一〇四五
一〇四六
一〇四七
一〇四八
一〇四九
一〇五〇
一〇五一
一〇五二
一〇五三
一〇五四
一〇五五
一〇五六
一〇五七
一〇五八
一〇五九
一〇六〇
一〇六一
一〇六二
一〇六三
一〇六四
一〇六五
一〇六六
一〇六七
一〇六八
一〇六九
一〇七〇
一〇七一
一〇七二
一〇七三
一〇七四
一〇七五
一〇七六
一〇七七
一〇七八
一〇七九
一〇八〇
一〇八一
一〇八二
一〇八三
一〇八四
一〇八五
一〇八六
一〇八七
一〇八八
一〇八九
一〇九〇
一〇九一
一〇九二
一〇九三
一〇九四
一〇九五
一〇九六
一〇九七
一〇九八
一〇九九
一一〇〇
一一〇一
一一〇二
一一〇三
一一〇四
一一〇五
一一〇六
一一〇七
一一〇八
一一〇九
一一一〇
一一一一
一一一二
一一一三
一一一四
一一一五
一一一六
一一一七
一一一八
一一一九
一一二〇
一一二一
一一二二
一一二三
一一二四
一一二五
一一二六
一一二七
一一二八
一一二九
一一三〇
一一三一
一一三二
一一三三
一一三四
一一三五
一一三六
一一三七
一一三八
一一三九
一一四〇
一一四一
一一四二
一一四三
一一四四
一一四五
一一四六
一一四七
一一四八
一一四九
一一五〇
一一五一
一一五二
一一五三
一一五四
一一五五
一一五六
一一五七
一一五八
一一五九
一一六〇
一一六一
一一六二
一一六三
一一六四
一一六五
一一六六
一一六七
一一六八
一一六九
一一七〇
一一七一
一一七二
一一七三
一一七四
一一七五
一一七六
一一七七
一一七八
一一七九
一一八〇
一一八一
一一八二
一一八三
一一八四
一一八五
一一八六
一一八七
一一八八
一一八九
一一九〇
一一九一
一一九二
一一九三
一一九四
一一九五
一一九六
一一九七
一一九八
一一九九
一二〇〇
一二〇一
一二〇二
一二〇三
一二〇四
一二〇五
一二〇六
一二〇七
一二〇八
一二〇九
一二一〇
一二一一
一二一二
一二一三
一二一四
一二一五
一二一六
一二一七
一二一八
一二一九
一二二〇
一二二一
一二二二
一二二三
一二二四
一二二五
一二二六
一二二七
一二二八
一二二九
一二三〇
一二三一
一二三二
一二三三
一二三四
一二三五
一二三六
一二三七
一二三八
一二三九
一二四〇
一二四一
一二四二
一二四三
一二四四
一二四五
一二四六
一二四七
一二四八
一二四九
一二五〇
一二五一
一二五二
一二五三
一二五四
一二五五
一二五六
一二五七
一二五八
一二五九
一二六〇
一二六一
一二六二
一二六三
一二六四
一二六五
一二六六
一二六七
一二六八
一二六九
一二七〇
一二七一
一二七二
一二七三
一二七四
一二七五
一二七六
一二七七
一二七八
一二七九
一二八〇
一二八一
一二八二
一二八三
一二八四
一二八五
一二八六
一二八七
一二八八
一二八九
一二九〇
一二九一
一二九二
一二九三
一二九四
一二九五
一二九六
一二九七
一二九八
一二九九
一三〇〇
一三〇一
一三〇二
一三〇三
一三〇四
一三〇五
一三〇六
一三〇七
一三〇八
一三〇九
一三一〇
一三一一
一三一二
一三一三
一三一四
一三一五
一三一六
一三一七
一三一八
一三一九
一三二〇
一三二一
一三二二
一三二三
一三二四
一三二五
一三二六
一三二七
一三二八
一三二九
一三三〇
一三三一
一三三二
一三三三
一三三四
一三三五
一三三六
一三三七
一三三八
一三三九
一三四〇
一三四一
一三四二
一三四三
一三四四
一三四五
一三四六
一三四七
一三四八
一三四九
一三五〇
一三五一
一三五二
一三五三
一三五四
一三五五
一三五六
一三五七
一三五八
一三五九
一三六〇
一三六一
一三六二
一三六三
一三六四
一三六五
一三六六
一三六七
一三六八
一三六九
一三七〇
一三七一
一三七二
一三七三
一三七四
一三七五
一三七六
一三七七
一三七八
一三七九
一三八〇
一三八一
一三八二
一三八三
一三八四
一三八五
一三八六
一三八七
一三八八
一三八九
一三九〇
一三九一
一三九二
一三九三
一三九四
一三九五
一三九六
一三九七
一三九八
一三九九
一四〇〇
一四〇一
一四〇二
一四〇三
一四〇四
一四〇五
一四〇六
一四〇七
一四〇八
一四〇九
一四一〇
一四一一
一四一二
一四一三
一四一四
一四一五
一四一六
一四一七
一四一八
一四一九
一四二〇
一四二一
一四二二
一四二三
一四二四
一四二五
一四二六
一四二七
一四二八
一四二九
一四三〇
一四三一
一四三二
一四三三
一四三四
一四三五
一四三六
一四三七
一四三八
一四三九
一四四〇
一四四一
一四四二
一四四三
一四四四
一四四五
一四四六
一四四七
一四四八
一四四九
一四五〇
一四五一
一四五二
一四五三
一四五四
一四五五
一四五六
一四五七
一四五八
一四五九
一四六〇
一四六一
一四六二
一四六三
一四六四
一四六五
一四六六
一四六七
一四六八
一四六九
一四七〇
一四七一
一四七二
一四七三
一四七四
一四七五
一四七六
一四七七
一四七八
一四七九
一四八〇
一四八一
一四八二
一四八三
一四八四
一四八五
一四八六
一四八七
一四八八
一四八九
一四九〇
一四九一
一四九二
一四九三
一四九四
一四九五
一四九六
一四九七
一四九八
一四九九
一五〇〇
一五〇一
一五〇二
一五〇三
一五〇四
一五〇五
一五〇六
一五〇七
一五〇八
一五〇九
一五一〇
一五一一
一五一二
一五一三
一五一四
一五一五
一五一六
一五一七
一五一八
一五一九
一五二〇
一五二一
一五二二
一五二三
一五二四
一五二五
一五二六
一五二七
一五二八
一五二九
一五三〇
一五三一
一五三二
一五三三
一五三四
一五三五
一五三六
一五三七
一五三八
一五三九
一五四〇
一五四一
一五四二
一五四三
一五四四
一五四五
一五四六
一五四七
一五四八
一五四九
一五五〇
一五五一
一五五二
一五五三
一五五四
一五五五
一五五六
一五五七
一五五八
一五五九
一五六〇
一五六一
一五六二
一五六三
一五六四
一五六五
一五六六
一五六七
一五六八
一五六九
一五七〇
一五七一
一五七二
一五七三
一五七四
一五七五
一五七六
一五七七
一五七八
一五七九
一五八〇
一五八一
一五八二
一五八三
一五八四
一五八五
一五八六
一五八七
一五八八
一五八九
一五九〇
一五九一
一五九二
一五九三
一五九四
一五九五
一五九六
一五九七
一五九八
一五九九
一六〇〇
一六〇一
一六〇二
一六〇三
一六〇四
一六〇五
一六〇六
一六〇七
一六〇八
一六〇九
一六一〇
一六一一
一六一二
一六一三
一六一四
一六一五
一六一六
一六一七
一六一八
一六一九
一六二〇
一六二一
一六二二
一六二三
一六二四
一六二五
一六二六
一六二七
一六二八
一六二九
一六三〇
一六三一
一六三二
一六三三
一六三四
一六三五
一六三六
一六三七
一六三八
一六三九
一六四〇
一六四一
一六四二
一六四三
一六四四
一六四五
一六四六
一六四七
一六四八
一六四九
一六五〇
一六五一
一六五二
一六五三
一六五四
一六五五
一六五六
一六五七
一六五八
一六五九
一六六〇
一六六一
一六六二
一六六三
一六六四
一六六五
一六六六
一六六七
一六六八
一六六九
一六七〇
一六七一
一六七二
一六七三
一六七四
一六七五
一六七六
一六七七
一六七八
一六七九
一六八〇
一六八一
一六八二
一六八三
一六八四
一六八五
一六八六
一六八七
一六八八
一六八九
一六九〇
一六九一
一六九二
一六九三
一六九四
一六九五
一六九六
一六九七
一六九八
一六九九
一七〇〇
一七〇一
一七〇二
一七〇三
一七〇四
一七〇五
一七〇六
一七〇七
一七〇八
一七〇九
一七一〇
一七一一
一七一二
一七一三
一七一四
一七一五
一七一六
一七一七
一七一八
一七一九
一七二〇
一七二一
一七二二
一七二三
一七二四
一七二五
一七二六
一七二七
一七二八
一七二九
一七三〇
一七三一
一七三二
一七三三
一七三四
一七三五
一七三六
一七三七
一七三八
一七三九
一七四〇
一七四一
一七四二
一七四三
一七四四
一七四五
一七四六
一七四七
一七四八
一七四九
一七五〇
一七五一
一七五二
一七五三
一七五四
一七五五
一七五六
一七五七
一七五八
一七五九
一七六〇
一七六一
一七六二
一七六三
一七六四
一七六五
一七六六
一七六七
一七六八
一七六九
一七七〇
一七七一
一七七二
一七七三
一七七四
一七七五
一七七六
一七七七
一七七八
一七七九
一七八〇
一七八一
一七八二
一七八三
一七八四
一七八五
一七八六
一七八七
一七八八
一七八九
一七九〇
一七九一
一七九二
一七九三
一七九四
一七九五
一七九六
一七九七
一七九八
一七九九
一八〇〇
一八〇一
一八〇二
一八〇三
一八〇四
一八〇五
一八〇六
一八〇七
一八〇八
一八〇九
一八一〇
一八一一
一八一二
一八一三
一八一四
一八一五
一八一六
一八一七
一八一八
一八一九
一八二〇
一八二一
一八二二
一八二三
一八二四
一八二五
一八二六
一八二七
一八二八
一八二九
一八三〇
一八三一
一八三二
一八三三
一八三四
一八三五
一八三六
一八三七
一八三八
一八三九
一八四〇
一八四一
一八四二
一八四三
一八四四
一八四五
一八四六
一八四七
一八四八
一八四九
一八五〇
一八五一
一八五二
一八五三
一八五四
一八五五
一八五六
一八五七
一八五八
一八五九
一八六〇
一八六一
一八六二
一八六三
一八六四
一八六五
一八六六
一八六七
一八六八
一八六九
一八七〇
一八七一
一八七二
一八七三
一八七四
一八七五
一八七六
一八七七
一八七八
一八七九
一八八〇
一八八一
一八八二
一八八三
一八八四
一八八五
一八八六
一八八七
一八八八
一八八九
一八九〇
一八九一
一八九二
一八九三
一八九四
一八九五
一八九六
一八九七
一八九八
一八九九
一九〇〇
一九〇一
一九〇二
一九〇三
一九〇四
一九〇五
一九〇六
一九〇七
一九〇八
一九〇九
一九一〇
一九一一
一九一二
一九一三
一九一四
一九一五
一九一六
一九一七
一九一八
一九一九
一九二〇
一九二一
一九二二
一九二三
一九二四
一九二五
一九二六
一九二七
一九二八
一九二九
一九三〇
一九三一
一九三二
一九三三
一九三四
一九三五
一九三六
一九三七
一九三八
一九三九
一九四〇
一九四一
一九四二
一九四三
一九四四
一九四五
一九四六
一九四七
一九四八
一九四九
一九五〇
一九五一
一九五二
一九五三
一九五四
一九五五
一九五六
一九五七
一九五八
一九五九
一九六〇
一九六一
一九六二
一九六三
一九六四
一九六五
一九六六
一九六七
一九六八
一九六九
一九七〇
一九七一
一九七二
一九七三
一九七四
一九七五
一九七六
一九七七
一九七八
一九七九
一九八〇
一九八一
一九八二
一九八三
一九八四
一九八五
一九八六
一九八七
一九八八
一九八九
一九九〇
一九九一
一九九二
一九九三
一九九四
一九九五
一九九六
一九九七
一九九八
一九九九
二〇〇〇
二〇〇一
二〇〇二
二〇〇三
二〇〇四
二〇〇五
二〇〇六
二〇〇七
二〇〇八
二〇〇九
二〇一〇
二〇一一
二〇一二
二〇一三
二〇一四
二〇一五
二〇一六
二〇一七
二〇一八
二〇一九
二〇二〇
二〇二一
二〇二二
二〇二三
二〇二四
二〇二五
二〇二六
二〇二七
二〇二八
二〇二九
二〇三〇
二〇三一
二〇三二
二〇三三
二〇三四
二〇三五
二〇三六
二〇三七
二〇三八
二〇三九
二〇四〇
二〇四一
二〇四二
二〇四三
二〇四四
二〇四五
二〇四六
二〇四七
二〇四八
二〇四九
二〇五〇
二〇五一
二〇五二
二〇五三
二〇五四
二〇五五
二〇五六
二〇五七
二〇五八
二〇五九
二〇六〇
二〇六一
二〇六二
二〇六三
二〇六四
二〇六五
二〇六六
二〇六七
二〇六八
二〇六九
二〇七〇
二〇七一
二〇七二
二〇七三
二〇七四
二〇七五
二〇七六
二〇七七
二〇七八
二〇七九
二〇八〇
二〇八一
二〇八二
二〇八三
二〇八四
二〇八五
二〇八六
二〇八七
二〇八八
二〇八九
二〇九〇
二〇九一
二〇九二
二〇九三
二〇九四
二〇九五
二〇九六
二〇九七
二〇九八
二〇九九
二一〇〇
二一〇一
二一〇二
二一〇三
二一〇四
二一〇五
二一〇六
二一〇七
二一〇八
二一〇九
二一一〇
二一一一
二一一二
二一一三
二一一四
二一一五
二一一六
二一一七
二一一八
二一一九
二一二〇
二一二一
二一二二
二一二三
二一二四
二一二五
二一二六
二一二七
二一二八
二一二九
二一三〇
二一三一
二一三二
二一三三
二一三四
二一三五
二一三六
二一三七
二一三八
二一三九
二一四〇
二一四一
二一四二
二一四三
二一四四
二一四五
二一四六
二一四七
二一四八
二一四九
二一五〇
二一五一
二一五二
二一五三
二一五四
二一五五
二一五六
二一五七
二一五八
二一五九
二一六〇
二一六一
二一六二
二一六三
二一六四
二一六五
二一六六
二一六七
二一六八
二一六九
二一七〇
二一七一
二一七二
二一七三
二一七四
二一七五
二一七六
二一七七
二一七八
二一七九
二一八〇
二一八一
二一八二
二一八三
二一八四
二一八五
二一八六
二一八七
二一八八
二一八九
二一九〇
二一九一
二一九二
二一九三
二一九四
二一九五
二一九六
二一九七
二一九八
二一九九
二二〇〇
二二〇一
二二〇二
二二〇三
二二〇四
二二〇五
二二〇六
二二〇七
二二〇八
二二〇九
二二一〇
二二一一
二二一二
二二一三
二二一四
二二一五
二二一六
二二一七
二二一八
二二一九
二二二〇
二二二一
二二二二
二二二三
二二二四
二二二五
二二二六
二二二七
二二二八
二二二九
二二三〇
二二三一
二二三二
二二三三
二二三四
二二三五
二二三六
二二三七
二二三八
二二三九
二二四〇
二二四一
二二四二
二二四三
二二四四
二二四五
二二四六
二二四七
二二四八
二二四九
二二五〇
二二五一
二二五二
二二五三
二二五四
二二五五
二二五六
二二五七
二二五八
二二五九
二二六〇
二二六一
二二六二
二二六三
二二六四
二二六五
二二六六
二二六七
二二六八
二二六九
二二七〇
二二七一
二二七二
二二七三
二二七四
二二七五
二二七六
二二七七
二二七八
二二七九
二二八〇
二二八一
二二八二
二二八三
二二八四
二二八五
二二八六
二二八七
二二八八
二二八九
二二九〇
二二九一
二二九二
二二九三
二二九四
二二九五
二二九六
二二九七
二二九八
二二九九
二三〇〇
二三〇一
二三〇二
二三〇三
二三〇四
二三〇五
二三〇六
二三〇七
二三〇八
二三〇九
二三一〇
二三一一
二三一二
二三一三
二三一四
二三一五
二三一六
二三一七
二三一八
二三一九
二三二〇
二三二一
二三二二
二三二三
二三二四
二三二五
二三二六
二三二七
二三二八
二三二九
二三三〇
二三三一
二三三二
二三三三
二三三四
二三三五
二三三六
二三三七
二三三八
二三三九
二三四〇
二三四一
二三四二
二三四三
二三四四
二三四五
二三四六
二三四七
二三四八
二三四九
二三五〇
二三五一
二三五二
二三五三
二三五四
二三五五
二三五六
二三五七
二三五八
二三五九
二三六〇
二三六一
二三六二
二三六三
二三六四
二三六五
二三六六
二三六七
二三六八
二三六九
二三七〇
二三七一
二三七二
二三七三
二三七四
二三七五
二三七六
二三七七
二三七八
二三七九
二三八〇
二三八一
二三八二
二三八三
二三八四
二三八五
二三八六
二三八七
二三八八
二三八九
二三九〇
二三九一
二三九二
二三九三
二三九四
二三九五
二三九六
二三九七
二三九八
二三九九
二四〇〇
二四〇一
二四〇二
二四〇三
二四〇四
二四〇五
二四〇六
二四〇七
二四〇八
二四〇九
二四一〇
二四一一
二四一二
二四一三
二四一四
二四一五
二四一六
二四一七
二四一八
二四一九
二四二〇
二四二一
二四二二
二四二三
二四二四
二四二五
二四二六
二四二七
二四二八
二四二九
二四三〇
二四三一
二四三二
二四三三
二四三四
二四三五
二四三六
二四三七
二四三八
二四三九
二四四〇
二四四一
二四四二
二四四三
二四四四
二四四五
二四四六
二四四七
二四四八
二四四九
二四五〇
二四五一
二四五二
二四五三
二四五四
二四五五
二四五六
二四五七
二四五八
二四五九
二四六〇
二四六一
二四六二
二四六三
二四六四
二四六五
二四六六
二四六七
二四六八
二四六九
二四七〇
二四七一
二四七二
二四七三
二四七四
二四七五
二四七六
二四七七
二四七八
二四七九
二四八〇
二四八一
二四八二
二四八三
二四八四
二四八五
二四八六
二四八七
二四八八
二四八九
二四九〇
二四九一
二四九二
二四九三
二四九四
二四九五
二四九六
二四九七
二四九八
二四九九
二五〇〇
二五〇一
二五〇二
二五〇三
二五〇四
二五〇五
二五〇六
二五〇七
二五〇八
二五〇九
二五一〇
二五一一
二五一二
二五一三
二五一四
二五一五
二五一六
二五一七
二五一八
二五一九
二五二〇
二五二一
二五二二
二五二三
二五二四
二五二五
二五二六
二五二七
二五二八
二五二九
二五三〇
二五三一
二五三二
二五三三
二五三四
二五三五
二五三六
二五三七
二五三八
二五三九
二五四〇
二五四一
二五四二
二五四三
二五四四
二五四五
二五四六
二五四七
二五四八
二五四九
二五五〇
二五五一
二五五二
二五五三
二五五四
二五五五
二五五六
二五五七
二五五八
二五五九
二五六〇
二五六一
二五六二
二五六三
二五六四
二五六五
二五六六
二五六七
二五六八
二五六九
二五七〇
二五七一
二五七二
二五七三
二五七四
二五七五
二五七六
二五七七
二五七八
二五七九
二五八〇
二五八一
二五八二
二五八三
二五八四
二五八五
二五八六
二五八七
二五八八
二五八九
二五九〇
二五九一
二五九二
二五九三
二五九四
二五九五
二五九六
二五九七
二五九八
二五九九
二六〇〇
二六〇一
二六〇二
二六〇三
二六〇四
二六〇五
二六〇六
二六〇七
二六〇八
二六〇九
二六一〇
二六一一
二六一二
二六一三
二六一四
二六一五
二六一六
二六一七
二六一八
二六一九
二六二〇
二六二一
二六二二
二六二三
二六二四
二六二五
二六二六
二六二七
二六二八
二六二九
二六三〇
二六三一
二六三二
二六三三
二六三四
二六三五
二六三六
二六三七
二六三八
二六三九
二六四〇
二六四一
二六四二
二六四三
二六四四
二六四五
二六四六
二六四七
二六四八
二六四九
二六五〇
二六五一
二六五二
二六五三
二六五四
二六五五
二六五六
二六五七
二六五八
二六五九
二六六〇
二六六一
二六六二
二六六三
二六六四
二六六五
二六六六
二六六七
二六六八
二六六九
二六七〇
二六七一
二六七二
二六七三
二六七四
二六七五
二六七六
二六七七
二六七八
二六七九
二六八〇
二六八一
二六八二
二六八三
二六八四
二六八五
二六八六
二六八七
二六八八
二六八九
二六九〇
二六九一
二六九二
二六九三
二六九四
二六九五
二六九六
二六九七
二六九八
二六九九
二七〇〇
二七〇一
二七〇二
二七〇三
二七〇四
二七〇五
二七〇六
二七〇七
二七〇八
二七〇九
二七一〇
二七一一
二七一二
二七一三
二七一四
二七一五
二七一六
二七一七
二七一八
二七一九
二七二〇
二七二一
二七二二
二七二三
二七二四
二七二五
二七二六
二七二七
二七二八
二七二九
二七三〇
二七三一
二七三二
二七三三
二七三四
二七三五
二七三六
二七三七
二七三八
二七三九
二七四〇
二七四一
二七四二
二七四三
二七四四
二七四五
二七四六
二七四七
二七四八
二七四九
二七五〇
二七五一
二七五二
二七五三
二七五四
二七五五
二七五六
二七五七
二七五八
二七五九
二七六〇
二七六一
二七六二
二七六三
二七六四
二七六五
二七六六
二七六七
二七六八
二七六九
二七七〇
二七七一
二七七二
二七七三
二七七四
二七七五
二七七六
二七七七
二七七八
二七七九
二七八〇
二七八一
二七八二
二七八三
二七八四
二七八五
二七八六
二七八七
二七八八
二七八九
二七九〇
二七九一
二七九二
二七九三
二七九四
二七九五
二七九六
二七九七
二七九八
二七九九
二八〇〇
二八〇一
二八〇二
二八〇三
二八〇四
二八〇五
二八〇六
二八〇七
二八〇八
二八〇九
二八一〇
二八一一
二八一二
二八一三
二八一四
二八一五
二八一六
二八一七
二八一八
二八一九
二八二〇
二八二一
二八二二
二八二三
二八二四
二八二五
二八二六
二八二七
二八二八
二八二九
二八三〇
二八三一
二八三二
二八三三
二八三四
二八三五
二八三六
二八三七
二八三八
二八三九
二八四〇
二八四一
二八四二
二八四三
二八四四
二八四五
二八四六
二八四七
二八四八
二八四九
二八五〇
二八五一
二八五二
二八五三
二八五四
二八五五
二八五六
二八五七
二八五八
二八五九
二八六〇
二八六一
二八六二
二八六三
二八六四
二八六五
二八六六
二八六七
二八六八
二八六九
二八七〇
二八七一
二八七二
二八七三
二八七四
二八七五
二八七六
二八七七
二八七八
二八七九
二八八〇
二八八一
二八八二
二八八三
二八八四
二八八五
二八八六
二八八七
二八八八
二八八九
二八九〇
二八九一
二八九二
二八九三
二八九四
二八九五
二八九六
二八九七
二八九八
二八九九
二九〇〇
二九〇一
二九〇二
二九〇三
二九〇四
二九〇五
二九〇六
二九〇七
二九〇八
二九〇九
二九一〇
二九一一
二九一二
二九一三
二九一四
二九一五
二九一六
二九一七
二九一八
二九一九
二九二〇
二九二一
二九二二
二九二三
二九二四
二九二五
二九二六
二九二七
二九二八
二九二九
二九三〇
二九三一
二九三二
二九三三
二九三四
二九三五
二九三六
二九三七
二九三八
二九三九
二九四〇
二九四一
二九四二
二九四三
二九四四
二九四五
二九四六
二九四七
二九四八
二九四九
二九五〇
二九五一
二九五二
二九五三
二九五四
二九五五
二九五六
二九五七
二九五八
二九五九
二九六〇
二九六一
二九六二
二九六三
二九六四
二九六五
二九六六
二九六七
二九六八
二九六九
二九七〇
二九七一
二九七二
二九七三
二九七四
二九七五
二九七六
二九七七
二九七八
二九七九
二九八〇
二九八一
二九八二
二九八三
二九八四
二九八五
二九八六
二九八七
二九八八
二九八九
二九九〇
二九九一
二九九二
二九九三
二九九四
二九九五
二九九六
二九九七
二九九八
二九九九
三〇〇〇
三〇〇一
三〇〇二
三〇〇三
三〇〇四
三〇〇五
三〇〇六
三〇〇七
三〇〇八
三〇〇九
三〇一〇
三〇一一
三〇一二
三〇一三
三〇一四
三〇一五
三〇一六
三〇一七
三〇一八
三〇一九
三〇二〇
三〇二一
三〇二二
三〇二三
三〇二四
三〇二五
三〇二六
三〇二七
三〇二八
三〇二九
三〇三〇
三〇三一
三〇三二
三〇三三
三〇三四
三〇三五
三〇三六
三〇三七
三〇三八
三〇三九
三〇四〇
三〇四一
三〇四二
三〇四三
三〇四四
三〇四五
三〇四六
三〇四七
三〇四八
三〇四九
三〇五〇
三〇五一
三〇五二
三〇五三
三〇五四
三〇五五
三〇五六
三〇五七
三〇五八
三〇五九
三〇六〇
三〇六一
三〇六二
三〇六三
三〇六四
三〇六五
三〇六六
三〇六七
三〇六八
三〇六九
三〇七〇
三〇七一
三〇七二
三〇七三
三〇七四
三〇七五
三〇七六
三〇七七
三〇七八
三〇七九
三〇八〇
三〇八一
三〇八二
三〇八三
三〇八四
三〇八五
三〇八六
三〇八七
三〇八八
三〇八九
三〇九〇
三〇九一
三〇九二
三〇九三
三〇九四
三〇九五
三〇九六
三〇九七
三〇九八
三〇九九
三一〇〇
三一〇一
三一〇二
三一〇三
三一〇四
三一〇五
三一〇六
三一〇七
三一〇八
三一〇九
三一一〇
三一一一
三一一二
三一一三
三一一四
三一一五
三一一六
三一一七
三一一八
三一一九
三一二〇
三一二一
三一二二
三一二三
三一二四
三一二五
三一二六
三一二七
三一二八
三一二九
三一三〇
三一三一
三一三二
三一三三
三一三四
三一三五
三一三六
三一三七
三一三八
三一三九
三一四〇
三一四一
三一四二
三一四三
三一四四
三一四五
三一四六
三一四七
三一四八
三一四九
三一五〇
三一五一
三一五二
三一五三
三一五四
三一五五
三一五六
三一五七
三一五八
三一五九
三一六〇
三一六一
三一六二
三一六三
三一六四
三一六五
三一六六
三一六七
三一六八
三一六九
三一七〇
三一七一
三一七二
三一七三
三一七四
三一七五
三一七六
三一七七
三一七八
三一七九
三一八〇
三一八一
三一八二
三一八三
三一八四
三一八五
三一八六
三一八七
三一八八
三一八九
三一九〇
三一九一
三一九二
三一九三
三一九四
三一九五
三一九六
三一九七
三一九八
三一九九
三二〇〇
三二〇一
三二〇二
三二〇三
三二〇四
三二〇五
三二〇六
三二〇七
三二〇八
三二〇九
三二一〇
三二一一
三二一二
三二一三
三二一四
三二一五
三二一六
三二一七
三二一八
三二一九
三二二〇
三二二一
三二二二
三二二三
三二二四
三二二五
三二二六
三二二七
三二二八
三二二九
三二三〇
三二三一
三二三二
三二三三
三二三四
三二三五
三二三六
三二三七
三二三八
三二三九
三二四〇
三二四一
三二四二
三二四三
三二四四
三二四五
三二四六
三二四七
三二四八
三二四九
三二五〇
三二五一
三二五二
三二五三
三二五四
三二五五
三二五六
三二五七
三二五八
三二五九
三二六〇
三二六一
三二六二
三二六三
三二六四
三二六五
三二六六
三二六七
三二六八
三二六九
三二七〇
三二七一
三二七二
三二七三
三二七四
三二七五
三二七六
三二七七
三二七八
三二七九
三二八〇
三二八一
三二八二
三二八三
三二八四
三二八五
三二八六
三二八七
三二八八
三二八九
三二九〇
三二九一
三二九二
三二九三
三二九四
三二九五
三二九六
三二九七
三二九八
三二九九
三三〇〇
三三〇一
三三〇二
三三〇三
三三〇四
三三〇五
三三〇六
三三〇七
三三〇八
三三〇九
三三一〇
三三一一
三三一二
三三一三
三三一四
三三一五
三三一六
三三一七
三三一八
三三一九
三三二〇
三三二一
三三二二
三三二三
三三二四
三三二五
三三二六
三三二七
三三二八
三三二九
三三三〇
三三三一
三三三二
三三三三
三三三四
三三三五
三三三六
三三三七
三三三八
三三三九
三三四〇
三三四一
三三四二
三三四三
三三四四
三三四五
三三四六
三三四七
三三四八
三三四

番太 一七八
ハンの木 二三、一三六
伴信友 一三九

ヒ・ビ

稗 五七、六六
稗の飯 二一一
日限市 二七七
瓢網 七九
瓢のヒサク 二一二
「斐太後風土記」 一八一
火棚 二一三
一カマ 二〇七
一筋町 二八一
姫小松 八四
枇杷 一四〇、一四九
「備陽記」 二四四
日傭 五八、六〇
日傭とり 二三四
日和山（ひよりやま） 一〇一
平場 二四四
平場の開墾 二五一
肥料 九八、一一〇、一二九、一九六、二〇三、二〇八
ビンダラヒ 一九〇
貧農の食物 三三

フ・ブ

蕗 三〇
フケ 二〇〇
フケ田 一一九、二五六

藤蔓 二二〇
藤井紫影博士 二一八
婦人の勞力 二六八
豚 一三五
物産館 一七五
物産陣列場 四一
部落有林 二〇四
ブリウチ 二一五、二一七
古道具屋 七
風呂 二六五
風呂の水 二七八
分教場 七〇
分家制度 七〇

ヘ・ベ

米穀檢査員 八〇

ホ・ボ・ポ

保安林 一一八、一三〇、一四二、一四三、二〇四
封建時代の慣性 二三〇
保管轉換 八九、九一
榾（ホタ） 二六五
墓地 二八
ボツカ 六八、六九、二〇六、二一〇
ホヤ（寄生木） 五九、一八五
ホラ 五九
掘兼の井 二六九
鑿り井戸 二七七、二八二、二八三、二八四
ボルドー液 二五
ポン 二一五

本郷　二四五
ポンス　二一五
ポンスケ　二一五

マ

盲人　一七八
抹草山　二五五
町の起原　二八〇
町の歴史　二八一
松浦氏　二九五
末子相續　二三六
松炭　二三〇
マツテクレ　一四一
マナゴ　一五二
繭商人　一三七

ミ

御影石　八三、一五一
御手洗　二七三
御手洗の水　二八三
水無澤　二六八
水の神　二七六
水番小屋　五七
三水梔　一三七、一四〇、一九五、二〇八
水無瀬川　二七〇
「美濃志」　一七七
明恵上人　一四四

ム

昔話　二九二

麥

村鏡（ムラカヾミ）　五七、七七、九四、九六
村の大きさ　二四八
村の形　二四五
村の種類　二四三、二四四
村の生活條件　二四七
村の成立ち　二四六
村持　二四〇
村持の山　二一三
村山　二一九
一九七

メ

名處（メウシヨ）　二四
瑪瑙細工　二三七
メンツウ　二五四

モ

木材の需要　二五四
模範工場　四三
籾殻　二三四、二六四
籾殻の竈　二六五
モミヂ　一一四
木綿（もゝひき）　一九六
股引（もゝひき）　一八五

ヤ

養魚　四
養蠶　二〇八、二〇九
洋服を着た人　二三〇
燒き印　二五七

ヤキタテ　二一三
焼畑　三六、八〇、一九七
薬師如來　二三〇
野獸の感覺　二七三
屋敷の木　五
野猪　二一三、二三一
宿屋の主人　二三三
ヤナギ　一六五
柳行李　一六六、一七七
屋根棟を押へる手段　二四三
屋根葺き　一九六
八幡黒（やはたぐろ）　二六五
山入りの權利　二〇四
山口　二五三
山添　二四四
山手錢　一九七
山手米野手錢（ヤマテマイノテセン）　二三三
山上　二四五
山の火入れ　三六
山袴　一四一
山畑　二〇九
山畑農業　三六
山元　二三三
ヤマモモ　一六九
山寄　二四四
山寄山入の村　二五一
山男　六四

ユ

ユカ無き家　一〇
輸出米檢査　三七
ユヒ組　一九六
百合　三六

ヨ

「鷹山公世紀」　四三
用水權　九一
用水の問題　二七六
夜着　一九六
横穴　二七六
横座　七一
ヨコジロ　二一三
他所者　三三、二三五
ヨダ　二四三
四つ辻　二七五
寄居　二八〇

ラ

勞銀　一四三

リ

旅行の面白味　三三六
旅行の見聞談　二三八
綠肥　五六、七三、九六、二〇三、二五四
燐礦　九七

レ

紫雲英（蓮華）　一四、七七、九六
連作を忌む　一一五

ロ

六地藏　一七
六部　二三七
轆轤細工　一一四
ロバートソン・スコット　四六

ワ

黄蓮（わうれん）　二〇九
「稚狹考」　一三九
「若狹國志」　一三九
輪島　八
わせ粟　八三
渡し場　二七五
藁　二〇五、二五九、二六五
藁細工　二〇〇
藁製品　一〇三、二六一
藁苞　二四一、二四三
藁灰　二六〇、二六一
蕨（わらび）の根　一九一
蕨のほどろ　二四一
藁卷鰤　九三
藁屋　一一四、一三七
藁屋根　七六
割木　二三一
椀木地　六七

ヰ

井カハ　二七一
藺作　二一

井戸　二七一
井ドバ　二七九
井神様　二七〇
藺蓆　二三

ヱ

越後縮　七
越後の七不思議　二一七
越前奉書　一二六

ヲ

小川琢治博士　二二三
桶結職　三五
長百姓（をさひやくしやう）　一四六
ヲダアシ　七五
小千谷縮　一一
ヲバコ節　四三
女の出稼ぎ　二一〇
女の勞銀　三五

24 1
納本
380
YK
6

柳田國男先生著作集　第六册

北國紀行

昭和二十三年十一月二十日發行

定價　二百三十圓

著者　柳田國男

發行者　梅山　糺

發行所　實業之日本社
東京都中央區銀座西一ノ三
電話京橋五一二一——五
振替東京三二六番

印刷所　大日本印刷株式會社

表紙　小倉印刷所

製本所　小原製本所

配給元　日本出版配給株式會社

刊行の言葉

こゝに柳田國男先生著作集を世に送るにあたつて一言刊行の趣旨を述べて置く。日本に民俗學の研究が興つて以來四十年、先生はこの學問の樹立者指導者として或は著述に或は講演に、又直接門下の教導に寧日なき有樣であつた。加ふるに民俗採訪の足跡は全國に遍く、山間の僻村洋上の離島に至るまでその見聞の精渉誠に掌を指すが如くである。民俗學の研究に志す者はもとより本邦文化史に思ひを寄する者、先づ先生の業績をたづねるは今日の常識である。然るに先生の論文著作はその數頗る多く而も容易に入手し難い。我等これを遺憾とし先生に乞うてその代表作をまとめて一望の下に公けにせんとす。幸ひに先生にはこの計畫を賛せられ此處に刊行の運びとなつたことを喜びとする。本著作集に取扱はれたる問題は廣範にして多岐、盡く在來史學の空白として殘されし分野に研究の歩を進め獨創の見を立てられたものである。衣食住、村落と家、冠婚葬祭、國民信仰、年中行事、婦人の生活、口承文藝、國語問題などいづれもその豐富なる資料を全國に亙る比較研究の下に來たし、こととさらに斷定を避けてこれを將來の研究に俟たれてゐる。我が日本の歴史が新らしき展開を告げんとするに際して我々は先づ常民の歴史を尋ねその將來の動向を決定せねばならない。學問の自由と率直なる批判の許されたる今日凡ゆる研究が精確なる事實の認識を出發點とせねばならない。この意味に於て本著作集の持つ意義は多言を要せざる處である。江湖の精讀を希望する次第である。たゞ現下出版界の惡條件は到底これを我々の理想とする形式の下に出版するを許さず、可能なる限りの努力を以て滿足するの外なきことである。讀者これを諒とせられたい。終りに臨み本計畫に援助を惜まざりし出版社各位に對し深甚の謝意を表するものである。（昭和二十二年三月　柳田國男先生著作集刊行會）

ㅍㄴ88

柳田國男先生著作集

第一冊	山の人生	初版五十圓
第二冊	地名の研究	再版百二十圓
第三冊	信州隨筆	初版百圓(品切)
第四冊	時代ト農政	初版百二十圓
第五冊	木思石語	初版百八十圓
第六冊	北國紀行	初版二百三十圓
第七冊	女性と民間傳承	近刊
第八冊	退讀書歷	
第九冊	續退讀書歷	

以下續刊